

舟の右側__丸山陽子宣教師

特集 日本人による世界宣教「弱い者なのに強くされ」台湾原住民に拓がるリバイバル

(6 ページ) 2018 年 8 月号

新連載「日本から台湾へ、台湾から日本へ」(各回 2 ページ)

- | | | |
|--------|---------------|--------------|
| 第 1 回 | 変えられた夫 | 2018 年 9 月号 |
| 第 2 回 | 神への飢え渴き | 2018 年 10 月号 |
| 第 3 回 | 香港で起こった神の癒し | 2018 年 11 月号 |
| 第 4 回 | 台湾でも起こった神のいやし | 2018 年 12 月号 |
| 第 5 回 | 新しい地へ | 2019 年 1 月号 |
| 第 6 回 | 「馬友友」伝道 | 2019 年 2 月号 |
| 第 7 回 | TANK の救い | 2019 年 3 月号 |
| 第 8 回 | 「精鷹出列」開催 | 2019 年 4 月号 |
| 第 9 回 | 聖霊による奇跡：共同生活 | 2019 年 5 月号 |
| 第 10 回 | 山地宣教体験ツアー | 2019 年 6 月号 |
| 第 11 回 | 高砂義勇兵 | 2019 年 7 月号 |
| 第 12 回 | 被災地におられる神 | 2019 年 8 月号 |
| 第 13 回 | 日本人クリスチャンへの尊敬 | 2019 年 9 月号 |
| 第 14 回 | 「日本人」として用いられる | 2019 年 10 月号 |
| 第 15 回 | 先駆者の足跡を辿る | 2019 年 11 月号 |
| 第 16 回 | 最終回 涙で蒔いた種 | 2019 年 12 月号 |

特集 台湾 コロナ禍の中 過去の経験が生きる

(2 ページ) 2020 年 6 月号

特集 宣教師のメンタルヘルス「三度の燃え尽きを通して学んだこと」

(4 ページ) 2022 年 3 月号

台湾の原住民出身の顔金龍（イエン・ジンロン）牧師と結婚して台湾の台北で原住民宣教に携わる丸山陽子宣教師。台湾の中でも差別的な扱いを受ける原住民の人々に深く関わり、生活を共にする中で、彼らの心にキリストの愛と福音が届いていった。特に、夫の顔牧師にいやしの賜物が与えられてからは、教会は急成長し、台湾からアジアへとインパクトを与えつつある。日本に一時帰国中の丸山宣教師に、これまでの歩みを聞いた。（聞き手・谷口和一郎）



「弱い者なのに強くされ」

台湾原住民に広がるリバイバル

丸山 陽子 宣教師

——まず、宣教師になろうと思った理由、顔先生と結婚に至った経緯を教えてください。

丸山 私は山梨県の甲府で生まれ育ったのですが、母親が長くうつ病を患っていて、私が大学生の時に自殺してしまいました。母はアッセンブリーの甲府基督教会に何度か行ったことがあって、母の死後、姉がまず教会に導かれて、その後、私と弟も行くようになりました。私はそこで人生の答えを見出しましたので、神様にすべてを捧げたいと思って中央聖書学校（現・中央聖書神学校）に入学しました。

そして入学して一週間ぐらいして夢を見まして、それは男の人が飛行機に乗って赤い旗を振っている夢でした。顔は見えないんですが、神様がはっきりと「あなたは、この人と結婚します。」とおっしゃったんですね。すると次の朝、台湾からの留学生が神学校に入学してきまして、それを聞いたときに、「あ、この人が昨日夢で見た人だ」と確信しました。まあ、そういう出

会だったのですが、それから一週間もしないうちに向こうから「お付き合いをしてくださいます」と申し込まれました。

ただ、私は神学校に入る前に5年間付き合った人と別れるという経験をしていましたので、彼に「付き合いとか付き合い合わないとかいうのは嫌です。結婚するんだっただけです。」と一言と彼が黒板に「結婚してください」と書いたもので、「はい」と答えてしまいました。出会って一週間です。本当に若気の至りだなあと思いますが。（笑）

——神学校の同級生だったわけですね。台湾宣教は、二人で祈って決められたんですか。

丸山 今だから言えるんですが、教団は主人の素性をあまり調べないで入学を許可したみたいですね。彼は神学校が費用を全額持つという招待留学生だったので、当時彼は教会にも行っていないし、聖書を読んだこともなかったのです。それが結婚を決めた後に分かって……。でも彼は、そ

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団（日本AG）の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。



夫と二人の娘と共に

の後聖書を読み始めて、神様を信じ、神学校の中で召命も受け取ったんです。それでまあ、卒業後は台湾に帰って一緒に伝道をしようという話になりました。

——台湾の原住民について教えてください。

丸山 大陸から漢民族が渡ってくるまでは、台湾には原住民だけが住んでいましたが、今は少数民族として人口の2〜3パーセントしかいません。日本の植民地だった時代、第二次世界

大戦の時には高砂義勇兵という名前で、日本兵よりも前線に行つて戦い、その多くが戦死しました。私の舅（夫の父）も、幸いにも命が守られて帰ってきた数少ない高砂義勇兵の一人です。原住民は一六部族いて、それぞれの言葉、衣装、音楽を持っています。最も大きいのがタイヤル族で、主人もタイヤル族ですね。以前は漢民族によって山岳地帯に押し込められていたのですが、今では生活のために

台北などの都会に出稼ぎに来ています。彼らには平等な選挙権も与えられていませんし、教育でも差別的な扱いを受けています。戸籍謄本に原住民であることが明記されますので、就職の時にはそれだけで不利になります。結局、収入の良い仕事に就くことはできず、男性は建築現場などでの作業、女性は、私たちが開拓を始めた頃は、かなりの割合がスナックなどの水商売で働いていました。

——日本人というのは、同じように植民地化した国でありながら、韓国とは違って台湾ではとても尊敬されていますよね。その尊敬されている日本人である丸山先生と、差別を受けている原住民の顔先生が結婚したというのは、非常に興味深い面があるのですが、台湾でのご自身の立ち位置としてはどのようなものだと思いますか。

丸山 おっしゃる通りに、日本人は、台湾の人たちにとって尊敬の対象なんです。台湾は日本に50年間統治されていましたが、ダムや鉄道、病院や温泉な

ど、いろんなインフラを日本が整備しました。今の台湾の発展は日本なくしてできなかったという感覚があり、また戦後、蒋介石が中国本土から連れて来た人たち（外省人）が台湾人を虐殺したりして、日本の統治の方が良かったと思ってくれる人が多いのです。だから、とても親日で、日本人の言うことだったら間違いのないという感覚があるので、それを大いに用いさせていたでいます。

今の私の教会の外における立ち位置は、「原住民を守る盾」のような感じですが、私も原住民の家族の一員なので、彼らは私を日本人とは思わずに一緒に差別してくるわけですが、そういう時はだいたい怒り狂いますね。学校でも役所でも駆け込んでいって、上を謝らせるまでやります。自分が日本人であることを明かして、私たちが差別するなら日本人を敵に回すぞ、ということをお願い続けます。特に、私たちの群れの原住民が差別されないように守ります。

——神の配割を感じますね。では、どのようにして伝道

を開始したのかを教えてください。

丸山 1995年から台北で開拓伝道を始めたのですが、最初は日本語教室を開きました。それをきっかけにいろんな人と友達になって、精神的な支えと経済的な支えをいただきましたね。でもやはり、漢民族と原住民の両方が来ていたので、どちらかに絞った方がいいという助言もいただき、原住民伝道一本で行くことになりました。

しばらくは台北のどこに原住民の人が住んでいるのかも分からなかったんですが、ある時、多くの原住民がスナック街にいるという情報を得まして、彼女たちの家を一軒一軒尋ね歩くようになりました。でも、夜の仕事なので、昼間に行っても寝ていて会えないんですね。そこで、夜にスナックに行つてお話しをするようになったんです。

彼女たちに会って、こちらはイエス様を伝えたいわけですが、教会に行くのは無理だと言うので、「何かお手伝いできることはないですか？」という感じで聞いて



スナックで共に祈る

ていたら、そのホステスさんたちが、子どもの話になると皆、涙を流して話すんですね。そこで、一対一の家庭教師をしましょうということになりました。そこから「台北市原住民センター」というNPO団体を立ち上げました。当時の台湾では、共産主義への反発が強かったので、小さな集会をするにも政府の認可が必要で、そこでNPOを取ることになったのです。

でも、スナックに行つて、すぐにホステスさんに話をさせてもらえるものなんでしょうか。
丸山 そういふ歓楽街というのは台湾のヤクザが仕切っているんですが、彼らは結構、自分たちが抱えた人の面倒を見てるんですね。私たちが原住民のホステスさんたちのケアをしたいと言つて訪れると、「彼女たちは実は可哀想なんだ。いろんな人にケアしてもらおうとが必要なんだ」と歓迎してくれるんです。ヤクザの人たちもたぶん、そういう経験を持つていると思いませんか。一般社会から疎外され、誰からも関心を持ってもらえないという悲しみを、彼らも経験してると思うのです。

——そういうお店で働いているのは、だいたい何歳ぐらいからですか。
丸山 親に売られてくる子が14歳ぐらいからいますね。だいたい一人何十万円という一時金が親に支払われていきます。14歳でそんな仕事に就いたら、あとから普通のOLとかにはなれないですよね。
——NPOの活動は、どのように発展していったのですか。

丸山 学童保育をして子どもたちを預かったんですが、お母さんたちは夜の仕事だから、みんな家に帰つても淋しくて、結局夜の12時、1時まで学童にいるんです。また帰つても、お母さんの彼氏とかがいて、女の子を帰すのは危ないんですね。それで宿泊施設をつくつて、子どもたちが泊まれるようにしました。あとは児童相談所から、引き取つてもらいたい子がいるとか、いろいろ相談されて、今では常時20名の未成年の子が住んでいます。

そして彼らは、成人するとアルバイトをするようになって、その近辺のアパートにシェアルームのような感じで住んでいますね。その子たちが未成年の子の面倒を見るケースもありますし、私の家でも8人の子どもを預かっています。私たち4人家族と合わせて12人ですね。大家族で雑魚寝しています。(笑)
私たちが子どもを預かる理由の一つに、原住民の人たちに子どもへの虐待が一般化しているという現実があります。彼らはお酒を飲むのが一つの文化なんです。貧しいと、どうしても鬱憤が下に向かいます。社会的に差別されている人というの、上に反発できないから、奥さんとか子どもとか、下に向かうんです。そして、私たちが関わっている子たちの多くが、幼少期にレイプされています。親や兄弟、おじさんや母親の彼氏などから、そういう性的虐待を受けているのです。女の子も男の子も。この働きを始めて10年ぐらいしてから、その事実を知ることがになりました。

——そういうことを告白してくれろとお願いするのは、よっぽどの信頼関係がないとできないことだと思います。どうやってその心の扉が開いたんですか。
丸山 それは主人の存在が大きいですね。私はやっぱり外国人なので、どこまでいっても彼らの心の痛みを共有することは難しかったです。そして、私たち夫婦の間にも壁があつて、主人には、私に捨てられたくないという思いが強かったようです。すごく無口で伝道教会にもどこか自信が無い感じでした。劣等感も強く、いつもおどおどしていました。
それが、結婚して10年目ですが、主人がある方のカウンセリングを受ける中で、自分も変わらなきゃと思つたんでしょね、私に一つのことを告白してくれました。それは、幼い頃に男性から性的な暴力を受けたという事実でした。でも私は、それを聞いても何ら夫婦生活は変わらなかったし、接する態度も変わらなかった。それで、自分は捨てられないと安心したんでしょね。講壇からその事実を話すようになり、全く別人のようになつてしましました。自信に溢れて、よく喋るようになり、礼拝説教が変わつてきましたね。そういう主人の姿を見て、子どもたちの中からも「実は自分もそういう体験をしました」という告白がいくつも出てくるようになったのです。
——洗いざらい話しても捨てられない、それでも愛されていくという事実が、ご主人を変えたんですね。では、ホステスをしていただ

母さんたちが教会に来るようになったきっかけを教えてください。

丸山 子どもたちは、私たちと生活を共にするようになって、神様を信じていきなりました。そして、お母さんのこともいろいろ話してくるようになったんですが、母親のことを憎んでいる子もいました。お酒を飲んだ母親にいつも虐待されていますから。それで、お母さんのために祈ろうという勧めをして、みんなで祈るようになったんです。「お母さんが、お酒をやめられるように。」教会に来ることができそうですよ。」と、子どもたちが泣きながら祈るようにになりました。

そこでは「先生」です。それはとても嬉しいことだと思えますね。また母語というのは、彼女たちにとって得意分野です。そういうお誘いをしたら、一人が先生になってくれまして、教会にも足を踏み入れてくれるようになったのです。そして、一人が救われたら、あとは早かったですね。ホステスさんがどんな教会に来るようになりました。それも、教会を開拓して10年後ぐらいのことです。主人のあの告白と同じ時期ですね。

——原住民の人たちは福音に対してはオープンなんですか。

丸山 台湾の山岳地帯には、どの山に行っても教会があります。イギリスの長老教会の宣教師が開拓したんですね。長老教会は貧しい原住民にミルクとか小麦粉を提供して、いましたから、教会に対しては良いイメージを持っていきます。ただ敷居が高くて礼拝には行っていないので、福音を聞いたのは初めてという人ばかりでした。

いんです。そこまで行く利益がなかったんでしょね。でもキリスト教は、見返りを求めない宗教ですから、どこまでも入って行くわけです。あとは、沖繩のユタのような占い師を信じる土着の宗教があります。悪霊信仰ですね。ただそれも力が弱くなっているの、



祈禱センターで祈る教会のメンバー

ういう霊的な面では伝道しやすかったと思います。

——24時間の祈りもやっておられるそうですね。

丸山 これは自分たちで始めたんじゃないんで、IHO Pとかの流れとも違います。タイヤル族の長老教会がリバイバルを求めて連鎖祈禱を始めて、そこに私たちが

参加させていただいたのがきっかけです。長老教会は、30年前に大リバイバルを経験していて、それをもう一度、という願いから始まりました。でも、始めてみると、彼らは祈らないんですね。すぐにやめちゃって、私たちがずっと祈り続けてたんです。

そして、ホステスさんたちは夜に強いもんですから、徹夜祈禱もできる。彼女たちはスナックで客にちやほやされていますから、教会に来て、人に仕えるとか、礼拝堂の掃除をするとか、そういうことは苦手なんです。でも、祈りの奉仕は本心に熱心にするようになりました。2010年に始めて、それがずっと続いています。

——24時間の祈りを積み重ねていって、礼拝の雰囲気とかは変わりましたか。

丸山 全く変わりましたね。主人のメッセージがすごく肯定的になったのはお話ししましたが、それに祈りが加わって、教会のみんなの中に、神ご自身に対する飢え渴きが出てきました。彼らは原住民として生まれて

きたわけですが、それは自分から選んだんじゃない。何か悪いことをしたから差別されているわけじゃない。そういう普通に見たらマイナスと思える状況を、それが神の選びであると理解するようになったんです。神様は、私たち弱い者、差別されている者を通して、何か社会にインパクトを与えてくださるんじゃないかという期待感が、教会全体に拡がっていききました。あの、生まれつきの盲人のようですね。

そこから、礼拝での賛美がすごく活発になりました。ただただ神様を賛美するというのが、賛美の歌詞も「私が、私を」というものが無くなり、神様の栄光だけをたたえる、神様の素晴らしさを賛美する、そういう賛美が主体になりました。そういう中で、教会の中に病のいやしが次々に起こるようになっていきました。

——病のいやしが起こり始める、きっかけのようなものはありましたか。

丸山 香港で神学校をやっている方とお友達になったんですが、あとから電話が

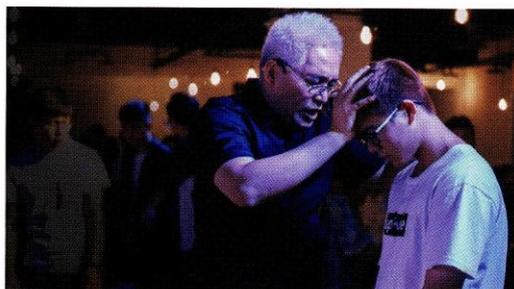
掛かってきて、香港に旅行に来ませんか、というお誘いでした。でも、うちの主人は結構外国嫌いで、香港に行ったら英語を話さなければならぬと思って、断ったんです。でも、また電話が掛かってきて、香港に遊びに来てくださいと言うんですね。そこで私も調べて、香港では北京語で大丈夫だよ、と主人を説得して香港に行くことにしました。ホテル代も食事代も出してもらえて、飛行機代だけで香港に遊びに行けると、家族全員で喜んで行きましたね。

そしたら、確かに初日の日中は観光だったんですが、夜には集会用意されました。「えー、集会は無いって言ったじゃん」と少しムツとしたんですが、集会所に行ったら「顔金龍いやしの集会」と書いてあって、病人がたくさん集まっています。最前列には車椅子の人が並んでいましたね。もう、やられた、はめられた、という感じです。当時、主人はいやしの賜物なんか持ってなかつたというか、そういう

御業は現れていなかったの、すごく抵抗してましたね。でも、牧師なんだから来ている人の祝福ぐらい祈ろうと思って、集会が始まりました。

その中に、ほとんど意識がないような状態の70歳ぐらいの中国人男性がいました。奥さんが連れて来てたんですが、二人とも未信者で「いやしの集会」とあるのを病院だと勘違いして入って来て、診察を待っていました。そして集会が始まったら、これはいったい何なんだとキョトンとしていました。でも、その奥さんが突然、異言をしゃべり始めたんです。さらに、その場に倒れてしまいました。その異言も、私たちが語っている異言と同じ異言でした。もうこれは聖霊の御業だということ、私たちも恐れを持ちました。その日は、顕著ないやしのわざは起きなかつたんですが、神様がここにおられるというらしをいただきました。そして次の夜の集会では、主人がいやしを祈ったら、車椅子の人が全員立ち上がったんです。あの意識が

ないような中国人男性も立ち上がりました。これは何かが始まったと思いましたが、私と二人の娘は翌日台湾に帰りましたが、主人は一週間残らされて、毎日いやしの集会をしたそうです。その人は主人の賜物を見抜いていたと言っていますが、本当かどうか分かりませんが、



いやしを祈る顔金龍牧師

(笑)。7年前の2011年のことです。

——台湾でもその御業は続いたんですか。

丸山 帰国後は二人で、「あれは外国で気が大きくなつて、信仰が与えられたんだよ。いやされた人たちに信仰があつたんだ。」とか言いながら、「でも、うちの教会

でも起こるかな？」と話していました。すると、そう話し合っていた次の礼拝に、足腰の弱い人が杖をついて来たんです。そこで、香港の時と同じように祈ったら、いやされてしまいました。

——それで、神様は場所に束縛される方じゃないと分かって、「いやしの集会」を開くようになりました。すると次々に病人が来るようになって、その人たちがどんどんその場でいやされていきました。歩けない人が歩き出し、がんの人が何人もいやされました。がんの人は、アフターケアが必要なので、病院に行つて予後を知らせてくれるようにお願いすると、ほとんどの人が次の週に病院に行き、がんが影も形もなくなっていました。そういう証がどんどん出てくるようになって、すぐに教会が一杯になり、日曜日の午後は毎週、教会から歩いて5分の場所にある「祈祷センター」で、いやしの集会を行っています。

——そういういやしが起きるときに、悪霊現象が出るケースもありますよね。

丸山 その通りです。すぐかつたですね。初期の頃は、途中で騒ぐ人とか、舞台上がって牧師の首を絞める人とか、しつちやかめつちやかでした。それで、そういう悪霊の現れにすぐに対応できるようにして、途中で大声を上げる人がいたら、その場で悪霊追い出しをするようになりました。すると、多くの人が悪霊から解放されていったので、それも大きな証になりました。

——教会の人数も増えたんじゃないでしょうか。

丸山 2011年頃に80人ぐらいでしたが、いやしが起こり始めてからはどんどん救われていって、今は400人ぐらいが礼拝に集っています。ただ、他の教会から来られたり、出たり入ったりも多いので、平均して400人という感じは、少しです。

——祈祷センターではずっと24時間の祈りを続けておられるということですが、祈りの波が低調になることはなかつたんですか。

丸山 あります。祈りの奉



祈禱センターで心から神を賛美する

仕者を全員解散させたこと
もありません。人がどんどん
増えてくると、自分がトッ
プになりたいという欲望が
出てくるんですね。ワー
シップリーダーでも、祈り

のリーダーでも、とにかく
自分がトップに立ちたい、
目立ちたいと。そうなる
もう悲惨で、未信者よりも
品性が低くなつて、それで
一回、祈りのチームを解散

させました。それで教会を
出ていく人もいましたが、
ホステスさんたちは全員残
りましたね。自分が悪かつ
たと、悪魔に誘惑されてし
まったと、すごく反省して
くれました。

——400人を牧会する
というのは、少し大変ですね。
丸山 確かに1対400
じゃあ、ちよつと無理だ
と思ひまして、信徒リー
ダーを訓練して、立てる
ようにしました。主人は
牧会者タイプじゃなくて、
信徒を育てるのは苦手
です。そこで私がリー
ダー訓練を担当する
ようになりまして。私
たちは2006年から「
原住民神学校」という
名前の聖書学校を
始めていたのですが、
伝道師コースに加
えて信徒訓練コース
を作りました。それは、
十数人のセルグループ
を導けるだけの力
をつけることが目的
です。今は教会内に
20のセルグループ
があります。

——いやしとは別に、他の要素で救われてくる人たちはいますか。

丸山 実は、原住民の子
ちつて歌がすごく上手
いんです。日本で言う
と沖縄の

子のような感じ
です。歌やダンスの
賜物が神様から与
えられています。彼
らの歌は、とてもス
ピリチュアルとい
うか、人の心を感
動させる、訴える
ものがあるんです
ね。そして最近
は、以前に芸能人
だった人たちが
も教会に来るよ
うになつて、音
楽のレベルが
すごく上がつて
きたのです。一
般の人が聞いて
も違和感のない
ような音楽で、
賛美歌に聞こ
えない賛美歌
をつくるよ
うになつて、
一般の音楽
事務所からも
声がかかる
ようになり
ました。そう
いう中から、
若者たちが
音楽やダンス
を通して
教会に
来て、救
われる
よ
う
に
な
り
ま
し
た。
400人のうちの
半分は、
そういう
音楽を
通して
教会
に来た
若者
たち
です。

——いやしを通して来た
方々と、音楽を通して来た
若者たち、その両者は一
緒に礼拝しているのです
か。

丸山 はい、一緒に礼拝
しています。一時、
分けようかと思つた
時もあったので
すが、両者とも「
分けて欲しくない
」と言つてきま
した。「何で？」
と聞いたら、
教会は家族
だから、親が

て欲しい、子ども
と一緒にいい、
と言うんです。
だから、私
たちの教会は
「家」という
感じが強い
ですね。こ
れからは、
若者たちが
結婚する
時期にな
つてきて、
来年あたり
から次々に
結婚して
いきます。
ホステス
さんたちは、
自分の孫
やひ孫ま
で見られ
ると思つ
て、楽し
みにして
います。

——台北神愛教会
としての使命のよ
うなものは明確
になつてきま
したか。

丸山 神様から導
かれてい
るのは、大
教会をつ
くること
ではなく、
台湾全土
に、さら
に言えば
アジア全
土にイン
パクトを
与えるこ
とです。た
とえば、
いやしの
証も、自
分の教会
だけで用
いるんじ
ゃなくて、
中国語を
用いてア
ジア全土
に流して
いく。そ
して芸能
人が多い
ので、芸
能活動通
して、中
国語がで
きる人た
ちに音楽
やダンス
を流して
いく。イン
ターネッ
トを通じ
て、その
ことは起
り始めて
いますね。

——そのイン
パクトが日本
にも及ぶこ
とを願つて
います。本
日は、あり
がとうござ
いました。

舟

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第1回 変えられた夫

台湾宣教師 **丸山 陽子**



「主よ、私をどこにでも遣わして下さい。」そう呟いて東京の神学校の門をくぐった。だが、海外に行くとは全く考えていなかったし、まさか台湾に嫁ぐなど、しかも原住民の嫁になるなど、露ほども思っていなかった。

た。あれからもう20年以上が過ぎた。夫の顔金龍(イェン・ジンロン)とは神学校で知りあった。正確に言えば夢の中で知りあった。とは言え、夢の中の彼は顔が見えなかった。夫とは判断できないが、夢の中

で飛行機に乗って赤い旗を振る男性を見た。そして、地鳴りのような声で「あなたはこの人と結婚する。」という声を聞いた。

翌朝、この男性が本当に目の前に現れた。彼は、神学校の招待留学生として日本に来た台湾の青年だった。

夫の顔は台湾原住民タイヤル族の頭目の次男として生まれた。次男と言っても実際は上に何人も兄がいたのだが、みな幼い時に死んでしまった。なぜなら、彼の出生地の山岳地帯には病院がなく、幼少期に病気になるれば、死ぬしかなかった。父親は第二次世界大戦で高砂義勇兵として日本のために最前線で戦い、敗戦後は多くの日本兵を助け、自力で台湾に帰国した。その後、牧師になり、タイヤルの各村を回りながら開拓する巡回伝道師になった。その息子の夫と私は、神学校の3年間を同級生として過ごし、卒業と同時に台湾に行って結婚した。

新婚生活は、国際結婚と開拓伝道のストレス、そしてカルチャーショックの毎日で、正直言って生きていくのが精いっぱいだった。それは、夫の身分が原住民であることとも関係があり、原住民は台湾ではずっと被差別民族であった。原住民は、生まれ落ちた時から差別の運命を背負わなければならないのだ。台湾では、戸籍謄本に「原住民」と記さ

れ、就職や結婚などで差別を受けることになる。

夫は結婚当初から、自分が原住民であることをあまり人に語ろうとはしなかった。人の前ではわざと身分を隠しているように見えた。肌の色もそれほど黒くはなく、眼鏡を掛けているので、見かけで原住民だと判断されることはほとんど無い。結婚当初は私も彼の身分についてそう意識することはなかった。その後、彼の原住民の身分そのものが私の人生の大きな任務に関係してくると思えもしなかった。

私たちは台湾の首都である台北市に住居を構え、自宅を開放して教会を始めた。伝道するにつれて、夫の家族や親族が少しずつではあるが教



台北にある私たちの教会

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団（日本AG）の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

会に来るようになった。彼らは、日本人や近所に暮らしている平地の人（台湾人や外省人）とは雰囲気や全く違っていた。その違った雰囲気がいなど感じることも、苦手だと感じることもあった。カルチャーショックが重なった最初の10年は、その違いが苦手だと思ふことの方が多くなった。その時期、私は非常に苦しかったが、病気になるなかったのは主の恵みだ。

夫が台北で伝道する様子を横で見ていると、いつもおどおどしているように見えた。特に平地の人の前で、時には日本人の私の前でもそうだった。私はずっと、それは彼の個人的な性格だと捉えていた。家にいる時、夫はさらに寡黙で、本ばかり読んでいた。私はとても寂しい思いをして、慣れない海外生活を過ごすしかなかった。その時は、その寡黙が原住民としての差別と傷から来ているとは知る由もなかった。

10歳を過ぎた上の娘が、ある頃から問題行動を起こすようになり、私はカウンセリングに通うようになった。台湾は牧師に対してのカウンセリング環境が整えられていて、良い

クリスチャンのカウンセラーに巡り会えた。彼女は、娘と私の心理相談を長年してくれているようになり、夫があまりに寡黙だったので、私には大きな助けとなった。

そのカウンセラーがある日、夫も連れて来なさいと言った。家に帰って誘ってみると、彼は驚くほどの抵抗を見せたが、私は何事につけ反対されるとよけい燃えるタイプで、嫌がれば嫌がるほど彼を連れて行くことと頑張り、彼は仕方なく一回だけ付き合ってくれることになった。

このカウンセラーはすぐに夫の寡黙の原因を捉え、それが原住民として長年受けてきた差別によって形成されたものであり、彼の本来の性格ではないことを見抜いてしまった。私は夫がそんなに差別で苦しんでいたとは知らず、そのことを何年も知らなかった自分や、差別していた平地の人たちに強い怒りを覚えた。本当にショックだった。そしてある日、夫はカウンセラーの前で衝撃的な経緯を語った。

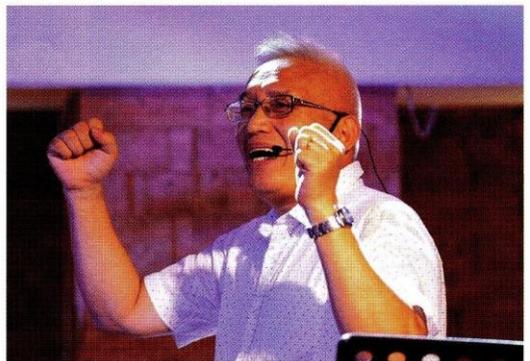
それは夫が小さい頃、原住民の習慣でこの家にも鍵はなく、誰でも山を訪問する人は村の家に泊まるこ

とができた。ある日、平地から商売に来た一人の外省人の老人が家に泊まった。その人は来るたびに色々なものを夫の家族に提供するため、家族はいつも喜んで泊めていた。しかし夜になると、老人は手を伸ばして隣に寝ている幼い夫の体をまさぐった。このことを夫はずっと誰にも言えなかったし、言っただけでもないと思っていたようだ。しかし夫は初めて、涙を流しながら、それをカウンセラーに話した。隣で聞いていた私も泣いた。

彼はすぐに教会の説教で、それを告白した。私にはとても衝撃的な内容で、これを聞いた人はショックで教会に来なくなるのでは？と心配したが、ほとんどの原住民の信徒が泣きながら説教を聞いていた。その日の礼拝は、感動に包まれ、聖霊の濃厚な臨在を感じるものとなった。

私にとってさらに驚いたのは、それ以来、夫の性格が全く変わってしまったことだ。家では急におしゃべりになった。外の世界でもおどおどすることが減り、時には平地の隣人と大喧嘩することもあった。今まで全く見たことのない夫の姿だった。

夫のその大きな変化を見て、以前の性格は生来のものではなく、原住民としての差別や幼少期の性的ハラスメントから来ていたことを確信した。それだけではない。教会の



力強くメッセージを語る夫

メンバーが次々と、自分も幼少期にレイプされたことや、性的ないたずらをされたことを告白し始めたのだ。女性だけでなく男性も、そのような被害に遭っていた。

内容があまりに衝撃的なことと、もう10年も彼らの牧会をしていながら何も分かっていなかった自分にあきれて、私は1か月ほど寝込んでしまった。しかし夫の方はというと、人が変わったように活動的になり、台北の名誉市民にも選ばれた。原住民としてはあり得ないことである。また、加入したばかりの教団の重要ポストにも選ばれた。

それを見ていて、私は嬉しただけではなく、主からのサインだと受け止めた。それは、主が夫を通して同胞である原住民を救おうとしているというサインであった。

私にとってさらに驚いたのは、それ以来、夫の性格が全く変わってしまったことだ。……
今まで全く見たことのない夫の姿だった。

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第2回

神への飢え渴き

台湾宣教師 丸山 陽子



私たちは台湾で良いクリスマスチャンスのカウンセリングの先生に出会うことができ、夫の顔が原住民という身分によって幼少期から受けてきたハラスメントや差別の深い傷から解放されつつあった。そのおかげで、まず私たち夫婦の関係が変わっていった。夫はそれまで非常に無口であっ

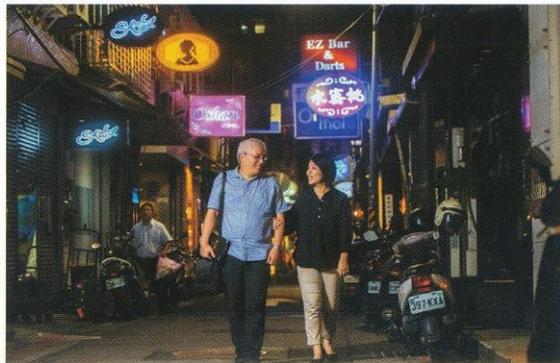
たが、家でもよく夫婦で話すようになった。また自分の意見を、特に怒りや悲しみを、人前でも言葉で表現するようになった。今まで人とぶつかった姿を見ることがない夫だったが、近所の人などが差別的な態度を示すと、口げんかになることが増えた。講壇においても、過去の辛い

体験を話すことが多くなり、涙で説教が止ってしまいうことも幾度かあったが、同じ痛みを経験してきた教会のメンバーも、夫の説教を聞きながら一緒に泣いていた。

私たちの教会は台北にあり、開拓当初は来会者のほとんどが原住民の女性とその子供たちであった。女性たちは皆、水商売や風俗の仕事に就いていた。教会のそばには林森北路という日本の歌舞伎町のような場所があつて、そこで彼女たちは夜通し働いていた。学歴もなく、故郷である山から降りてきて漢民族の男性と結婚したものの、ほとんどが離婚し、ひとりて幼い子供を育てていかなければならない。当時は非常に多くの原住民女性がスナックやパブなどで働いていた。

私たちは開拓の初期から一軒一軒スナックを訪問して、そこで働く女性たちを教会に誘ったが、日曜日の朝は起きられないのと、仕事自体への罪悪感から、礼拝への出席は拒否された。そこで私たちは、学童保育を始め、まずは彼女たちの子供の世話をするところから始めた。すると、多くの原住民の児童が毎日教会に来るようになり、福音を信じるようになった。さらに、その子たちが中学生になった頃、母親が教会に来るようになると、皆で真剣に祈るようになった。その結果、一人また一人と、スナックのホステスやママさんが教会

の礼拝に来るようになったのだ。



一人の魂を求めて夜の街を歩く

一方で、教会の構成員が原住民のホステスとその子供たちばかりになったことで、頭を抱えることも多くなった。なぜなら、彼女たちは俗に言う「左うちわ」で、人に仕えることができなかつたからだ。日曜学校の教師はもちろん、食事の用意や掃除といった日本の教会だと婦人部がやるようなこともできなかった。それでも彼女たちは、何かをして教会の役に立ちたいと、心から願っていた。

そんな時に私たち夫婦は、台湾の長老教会が主催するタイヤル族の祈りの集いに講師として呼ばれた。そして、彼らが24時間の祈りを始めるので、私たちの教会のメンバーも

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団(日本AG)の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

ローテーションに入るように誘われた。その知らせを教会に持って帰ると、ホステスの女性たちは待つてましたとばかりに、「その奉仕なら私たちにも出来る」と言いつつ、すぐに申し込んだ。

ホステスは夜が強いので、夜中から朝までの時間を私たちの教会が担当することにした。誘ってくれた長老教会のグループは、途中で24時間の祈りを止めてしまったが、彼女たちはずっと続けていきたいと願った。なぜなら、この24時間の祈りだけが彼女たちが奉仕できる場所だったからだ。

そのホステスの姉妹たちが、夫が講壇で差別の苦しみを語るたびに一緒に泣いていた。そして、自分たちがもっと大きな差別やレイブ被害を受けてきたことを告白し始めた。

春香姉妹は、幼少の頃に両親に売られて台北にきた。彼女はしばらく萬華という地区の鉄格子のある部屋で、大人を相手に売春をさせられていた。中学生になって保護され、山に戻されたが、親や兄弟が貧しさのために苦しんでいる様子を見ると、今度は自分の意志で台北に下りてき

けれども、しばらく祈りが続けていられなくと、彼女たちの中に変化が出てきた。それは、価値観や考え方の変化であった。

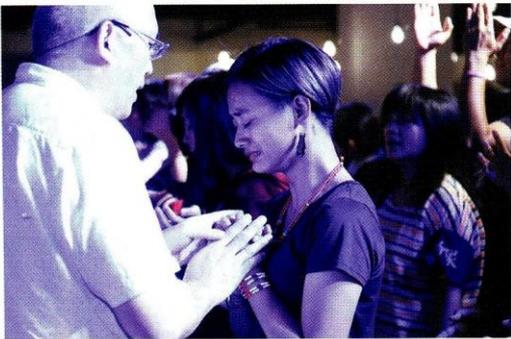
てスナックで働くようになった。そして、売れっ子ホステスにまで登りつめた。しかしその後、別の店のホステスから嫉妬されて命を狙われ、殺されそうになり、自暴自棄からアルコール中毒になったところで教会に来た。

美佳姉妹は、兵隊に行った兄や大に行った妹の経済的支援をするのが自分の使命だと親から説得され、台北に下りてきた。しかし、普通の仕事を探したが見つからず、すぐに高収入を得られるホステスという職業を選ばざるを得なかった……。このような告白が続き、教会はしばらく悲しみに打ちひしがれるように見えた。私も、その衝撃的な内容を聞いて、しばらく寝込んでしまった。

しかし、皆が悲しい体験を告白すればするほど、神に対する飢え渴きが増していったのを覚えている。このような悲しみは、ただ神にしか救うことができないと、誰もが思わざるを得ないような雰囲気になった。人種差別で受けてきた傷は、原住民の彼らには全く非がない。彼らは生まれ生きてすぐ、この不条理な重荷を背負わなければならず、自分の力

では状況をどう変えることもできない。彼女たちはその不公平や理不尽を「24時間の祈り」の中で神に訴え、溜めてきた悲しみや怒りを発散しているように私には見えた。

けれども、しばらく祈りが続けていられなくなると、彼女たちの中に変化が出てきた。それは、価値観や考え方の変化であった。同胞の原住民の回復や癒しのために祈る時間が増え、このように差別される人種として生まれたことには、もしかしたら何か意味があるのではないかという思いが与えられるようになった。そして、何か神の重要な選びが原住民にあり、その任務を果たすため、他の民族よりも試練を通らねばならないのではないかと、使命感のようなものが生まれつつあった。そのような思いは、神学的な洞察から生



多くの原住民クリスチャンに癒しが与えられた

まれたのではなく、涙の祈りの中で聞いた、主からの小さな声のようなものであった。

その思いは日に日に強くなっていった。それはまず、神を礼拝するときの賛美の変化として現れた。神の素晴らしさや麗しさに焦点を当てた賛美が増え、自分がどうするかや、どう思うかといった、人間に焦点を当てた賛美が少なくなった。なぜなら、この差別がある世界では、自分たちを含めて人間の本来には希望が見いだせなかったからだと思う。差別の状況を見て打ちひしがれるのではなく、あのユダヤの地で差別を受けていた人々に触れ、真の自由を与えたイエス・キリストを見上げたい、という思いが与えられたのだ。

思いがけず、夫が教団の重要ポストに選ばれたことも、教会の皆が神からのしるしと受け止め、近い将来、神は私たちの群れを特別に用いてくださるだろうとの期待感を持てるようになっていった。ただ実際の生活を見ると、世間の差別は依然と同じようにあり、経済的にも食べていくだけで精一杯で、自分たちの子供や孫たちの世代に何かが起こればそれで良しとするような、漠然とした思いだった。少なくとも日本人の私には、その後、教会内で起きる大きな変革を予測することも、また準備することもできなかった。

前

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第3回

香港で起こった神の癒し

台湾宣教師 **丸山 陽子**



クリスチャンのカウンセラーを通して、主は夫が幼少期から受けてきた差別と性的ハラスメントの傷を癒して下さった。また夫の真実な証を聞いて、教会に集いつつあった原住民のホステスの女性たちも、その心が溶かされるように変わっていった。その変化は、教会全体に神

への強い期待をもたらし、ホステスたちを中心に24時間の祈りを導いた。何が原住民を通して起こるのでは、という期待感が私の内側にも生まれつつあった。だが実際の生活はというと、貧困と、まだまだ続く差別の戦いや、牧会の気疲れも重なって、私たち夫婦の精神状態は限

界に達していた。

そんな折、香港の友人から連絡が来た。彼は香港で長年ワーシップと聖霊の賜物のあふれる集会を導いている牧師で、ごく最近友達になったばかりだった。その彼が夫を講師として迎えるから香港に来ないかとお誘いであった。夫は元々とても出無精な性格で、さらに香港は英語を使うところだと勘違いして、この誘いを断った。しばらくすると、もう一度彼から連絡が来た。家族全員で香港に招待して下さるとの誘いだった。また香港では北京語も使えるという情報も得た。私たちは新婚旅行にも行っておらず、多忙で家族旅行もほとんど行ったことがなかった。家族で香港に旅行できると聞いて、夫もやつと重い腰を上げてくれた。

初めての香港旅行の初日、友人は子供たちが遊べる所にもたくさん連れて行ってくれて、レストランの料理も大変おいしく、本当に楽しかった。そして2日目もまた別な観光地で楽しんでみると、この友人から「今晚は祈禱会があるので、夫婦で導いて欲しい」と言われた。旅行に招待されたのだから、遊びに来たついでに祈禱会くらい手伝うのは当然のことだと思い、私たちは快諾した。ところが、集会場所に到着して、私たちは目を疑った。集会場所に通じる通路には何枚もの大きなポスターが張られていたのだ。そこには「顔

金龍牧師 癒しの集会」と書かれてあった。それを見て私たちは、正直、友人に騙されたと感じた。家族旅行をダシにして夫に奉仕させることが目的だったのではないかと思った。

しかも「癒しの集会」と書いてあったので、会衆はほとんどが病気を抱っている人たちであり、最前列は車椅子の人が少なくとも5人は来ていた。夫はそれを見て、非常に戸惑っていた。実は夫は、病の癒しの祈りなどしたことがないので、実際



原住民のために祈る

にどう祈っているのかわからなかったのだ。

私はというと、どんな集会でも主を賛美できること、また人々に奉仕できることは伝道者の喜びだと感じた。癒されるかどうかより、人々の祝福のために祈ることは伝道者として当然なことだとポジティブに受け止めた。

集会が始まり、夫は救いのメッセージを語った。そして招きの時間

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団(日本AG)の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

になると、夫は講壇からなかなか降りて来ようとはせず、ただ講壇で主の前に祈っていた。私も招きの祈りに参加していたので、夫の手を引いて病人のところに行き、祝福を祈るよう夫に促した。

すると一人の細身の女性が、脳梗塞を患った老人(主)が座っている車椅子を押して前に出て来た。この女性は中国大陸の方で、その香港の老人に嫁いできていた。このような夫婦は台湾にも多く、中国大陸出身の貧しい女性が経済的豊かさを求めて年の離れた年配者に嫁いでいる。彼女はポスターを見て、ここが病院だと思っただけと言った。教会には今まで一度も行ったことがないという。また彼女は、他で見たようなお金のためだけに嫁いだ人ではなく、この年配の夫に愛情があるようで、「ここがどこでもいいから、夫によくなくて欲しい」と訴えた。

脳梗塞のその男性は、意識はあるものの全身が麻痺しているようで、言葉さえ出せなかった。それでも私は夫の手を取って、この夫婦の祝福を祈り始めた。癒しは起こらなかった。しかし祈っていると、教会にも

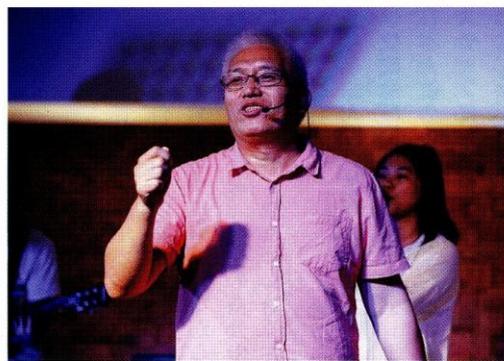
すると先ほどの脳梗塞の男性が、いきなり立って歩き出した。さらに他の車椅子の病人も、立って歩きだした。

行ったことのないこの中国人女性が、突然叫び声をあげた。そしてなんと、彼女の口から異言が溢れ出した。それは、私たちが教会の中でよく聞いている異言と同じだった。

私の頭は混乱した。私が受けてきた神学教育では、救いが先にあり、そのあと学びがあつて、聖霊を求めることによって初めて異言が出る(聖霊のバプテスマを受ける)と理解していたし、私もそのような順番をたどった。しかし目の前にいる女性は、今まで教会に行つたことがないのに異言を語り、しばらくすると、その場に倒れてしまった。いわゆる聖霊に倒されるという現象だ。

この集会では顕著な癒しは起こらなかった。しかしこの女性を見て、私たちも会衆も、神の霊への深い畏れに包まれた。そして、この集会は1日だけでなく、3日続くことが分かり、司会者も会衆に向かって「明日も必ず来るように」と勧めていた。2日目の集会にも、この夫婦は来ていた。そして最善列の車椅子の数は、さらに増えていた。夫は昨日とは違い、主への期待に溢れていた。その表情には、もう恐れはなくなっ

ていた。そして招きの時間になると、大胆に手を置いて病人の癒しのために祈りだした。しかも最初に、車椅子の方々のために祈った。すると先ほどの脳梗塞の男性が、いきなり立って歩き出した。さらに他の車椅子の病人も、立って歩きだした。



メッセージを語る夫・顔金龍牧師

と音を出すのをはつきりと聞いた。私には初めての経験で、癒されていく人々とその家族の表情を見て、涙が止まらなかった。

その集会から、非常に多くの人が癒され始めた。最終日の3日目にはほとんどの人が癒され、夫はそのまま香港にしばらく残ることになった。娘たちの学校のこともあり、私と娘は先に帰国したが、夫はそのあと香

港で10回ほどの癒しの集会を終え、へとへとになって台湾に帰って来た。今でもこの香港の友人と、この時の事を話すことがある。私が冗談っぽく「家族旅行だと言われて行つたのに騙された」と言うと、彼は「顔先生の賜物は癒しだと見抜いていたから旅行に誘ったんだ」と答える。彼の言うことが本当かどうかは定かではないが、主がこの友人を用いられたことは確かだ。

香港で起こった事は、しばらく夫婦だけで話し、教会の人には話さなかった。なぜなら、私たちにとって香港での出来事は、夢の中のことのように、現実感がなかったからだ。外国の香港だから私たちの気が大きくなつて、あるいは会衆が台湾の人より信仰深かったから顕著な癒しが起こつたのではないか、などと夫婦で話していた。いま思うと、何とも疑い深い心の状態だった。

けれども、ある日の日曜礼拝に、膝を痛めたアミ族の老婦人が家族に連れられて来会した。そして説教が終わると、夫はその老婦人の膝に手を置いて祈った。私は心の中で、香港と同じことが起きるだろうか?と思いつつも、一緒に祈った。すると果たして、香港で起こったと同じいやしの業が、私たちの教会の礼拝の中でも起こつたのである。

(次号につづく)

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第4回

台湾でも起こった神のいやし

台湾宣教師 丸山 陽子



香港の友人の導きで夫のいやしの賜物は明るみに出されることになった。そんな賜物が夫にあるとは、本人も私も全く気づいていなかった。確かに過去を振り返ると、夫が同席して一緒に祈っている所で病人のいやしが起きたことは何度もあった。しかし、他の信徒や牧師も一緒にい

た席で起こったことだったので、皆で祈った結果だと私は捉えていた。香港のいやしの集会で、夫が手を置いて祈った病人が次々といやされるところを目撃した。私にとつては非常に衝撃的な出来事であった。そして台湾に帰ってから、私たちの教会の朝の礼拝でも、夫がアミ族の老

婦人の膝のために祈った結果、同様にいやしの御業が起こった。それ以降、説教が終わると招きの時間を持ち、体のいやしや問題の解決のために祈るようになった。その結果、教会員の病气やケガも次々にいやされるようになった。

私たちはいやしの業が起こる10年ほど前から、身寄りのない原住民の学生を引き取って育てる働きをしていた。原住民の子供たちはみな山岳地帯で生まれるが、山には学校が無いか、学校があっても教師がいない。そこで、法律的には義務教育なので、子供だけで山から下りて平地の学校に行かなければならない。そのため措置も政府は全く考えていないため、原住民の学生は親戚や知り合いを当てにして台北に降りてくる。

けれども、この親戚や知り合いもほとんどが当てにはならず、非常に危険な場所に下宿せざるをえない状況がたくさんあった。当時は、ホステスをしている原住民女性への伝道だけでなく、身寄りのない原住民学生たちを引き取って育てることも、私たちの主要なミニストリーになっていた。

彼らは幼稚園も小学校もまともに出ていないため、台北の学校に通ってもすぐに落ちこぼれてしまう。そして、生きる自信まで失い、アル

コール依存や売春などに転落している。私たちは、そうした状況を防ぎ、何とかこの子たちに自信を与えたいと、宿泊施設や食費・学費を用意して育て始めた。ホステスの子供たちもこれに加わり、私たちの自宅も教会も、夜は学生で一杯になってしまった。



原住民の学生たち

学生たちを引き取ったものの、彼らに勉強を促しても読み・書き・計算の基礎がないために、他の学生にはなかなか追いつけなかった。けれども、彼らはスポーツや音楽、ダンスなどにはずば抜けた才能があり、教える人がいなくても実力を発揮し始めた。男の子たちは、学校が終わると教会に鞆を置いてバスケットやダンスに打ち込み、女の子たちは楽器や歌などを習い始めた。

その頃の私の悩みは、男の子たち

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団（日本AG）の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

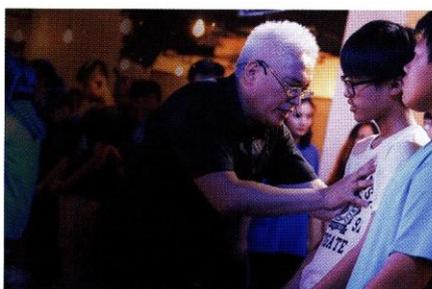
が毎日のようにバスケットで怪我をすることだった。ひどい捻挫をして学校を休まざるをえないことが何度もあり、バスケットを禁止した時期もあった。学校ではじめられることが多い原住民の学生は、スポーツをする際にはここぞとばかり張り切り過ぎて、そのためにケガをするのだ。

この男子学生たちが、説教後、前を出て祈るようになった。夫が、手を当てて彼らの捻挫した関節のために祈り始める。私は祈る夫の横で心を合わせていると、あの香港の時と同じように、祈られている学生の骨や関節がカタカタと音を立てるのを何度も聞くこととなった。男子学生の表情はいつも、驚きから喜びへと変わっていった。そして最後は、夫に抱きしめられて泣き崩れる姿があった。

山から一人で大都会に下りてきて、どんなに寂しく心細かっただろう。山にいる原住民の父親はほとんどがアルコール依存症で、父親から抱きしめられたり優しくされたりしたことが全くない学生ばかりだった。彼らは本当は、心の底から父親の愛を求めていたのだ。バスケットで痛めた足が治っただけでなく、主は夫の祈りを通して彼らの心をも癒してくださった。その頃すでに20人ぐらいの原住民の学生を引き取って共同生活をしていたので、彼らのいやしは医療費の節約にもなり、経済的にも大

変助かった。

いやしが始まって以降、教会の信徒たちは病気になるったりケガをする、日曜日だけでなく平日でも夫の部屋を訪れるようになった。その祈りによって、信徒たちのガンや肝硬変、腎臓の病気などがいやされていった。私や娘たちも、もちろん例外ではなく、ケガをしったり体の調子が悪くなると、病院に行く前に、まずは夫に祈ってもらうようになった。



若者たちのために祈る夫

お陰でこの6年間、歯の洗浄と何かの検査以外、保健証を使用せずに過ごすことができています。

夫の上の妹も外国で膠原病を患い、手の指が全部曲がった状態で台湾に帰国した。彼女は牧師の娘として育ったが、未信者と結婚したこと機に信仰から離れてしまった。妹の夫は外国で事業に失敗し、しばらくは台湾に帰るお金もなく、食べるにも事欠く状態だった。夫の妹は、

過労とストレスでその病気になる、非常にやつれた状態で帰国した。また、一緒に帰国した三人の子供たちも、栄養失調になったり自傷行為を繰り返したりしていた。

妹は夫の祈りで見えるいやされ、指のかたちも正常に戻り、教会にも帰って来ることができた。三人の子供たちも、一時的に私たちが引き取ることになり、精神的にも肉体的にも健康を取り戻すことができた。

「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」

(ルカ4・18-19)

イエス・キリストは宣教を始めるにあたって、イザヤ書のこの箇所を宣言した。そして、そのことばとおりに、貧しい人や病気の人の、しいたげられている人の所に出て行って、福音を告げ知らせ、人々をいやし、解放していった。私たち夫婦が結婚して台湾に遣わされた時、何をするか、誰に伝道するか、当初は何の計画もなかった。しかし聖霊の導きによって、イエスと同じく、貧し

く、しいたげられた人々の所に行くこととなった。そこにはいつも、主が導いておられるという感覚があった。

教会で次々と起こるいやしの奇跡を見て一番喜んだのは、原住民ホステスの女性たちだった。彼女たちは闇の中から救われ、24時間のローテーションを組んで教会のため、台湾のリバイバルのために祈ってくれていた。彼女たちは、その祈りの結果を見たとき捉えて、以前より増して力を込めて祈るようになった。

私たちは、このいやしの御業を外に宣伝することはしなかった。むしろ私の中には、人には知られたくないという思いがあった。混乱や批判を恐れていた。けれども、病気がいやされたという証は教会の外にも伝わり始め、信徒の家族や知人がいやしを求めて礼拝に来るようになった。その結果、礼拝の時間が長くなった。席が足りなくなることとなり、日曜日の朝の礼拝とは別に午後の集會を増やして、いやしだけを特別に祈ろうということになった。

この午後の集會では、ワークショップを特別に編成し、原住民ホステスの子供たちが主に担当してくれるようになった。彼らは音楽のセンスと霊的感覚に長けていて、聖霊の臨在を感じる素晴らしい讚美の導きをしてくれるようになった。

(次号につづく)

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第5回 新しき地へ

台湾宣教師 **丸山 陽子**



日曜日午後の「いやしの集会」には、いやしを求める方だけでなく、他教会の教職や信徒も噂を聞きつけて徐々に加わるようになり、狭い礼拝堂は一杯になってしまった。福音派の機構で働くある牧師は、その頃この集會に度々参加するようになり、ある日、集會が終わると私たちを呼

び出して、このようないやしの集會はこんな狭い教会でするべきでなく、もっと大きな集會所に移るべきだと助言した。そして彼自身も集會の移動の過程を手伝いたいと言ってくれた。彼は超教派で活躍している人で、バックに企業家が付いていることを私たちは知っていた。夫や教会のメ

ンバーはこの人が出資してくれるから問題ないと、すぐにいやしの集會ができる広い場所を探しかかった。しかし私はいと、あまり乗り気ではなかった。なぜなら平日は引き取っている原住民学生の世話や学童保育の仕事で既に過労状態だったからだ。その上、日曜の朝は教会で主日礼拝、午後は移動していやしの集會となれば、今でも超多忙なのに、私の体力は続くだろうか、しきりに心配していた。

私たちは、教会から歩いて5分ほどの所に500人以上の集會ができるような場所があることを知っていた。この場所は、以前はスーパーマーケットで、その後閉業して空き家になっていった。教会の近辺は中山区とあって台北の昔の中心地であり、地価や家賃が非常に高く、私たちには一般のアパートでさえ借りることが難しい。私たちは家賃節約のため、教員や原住民の学生たちと大勢で一軒の家に住んでいた。ましてや500人以上入れる広い場所の家賃など、どんなに大きな支援があつたとしても払うことは無理だと最初から諦めていた。そこで、この場所は眼中に入らず、郊外に良い物件がないかと探した。学校や公民館など手当たり次第に電話をして聞いたが、いやしの集會にふさわしい場所はなかなか見つからなかった。

そんなある日、あの福音派の機構で働く牧師が、その500人収容の物件に気づいて、それを薦めてきた。彼は、大家さんとの家賃交渉や物件のチェックなども積極的にしてくれて、「ここしかない」と主張した。教会の折りのグループも場所を見に行き、ここそ主が選んだ新地だと確信したと、私に訴えて来た。

私はこの話が進んでいる間、新しい場所が与えられたとしても、改装はどうするのか、備品はどのように準備するのか、掃除は誰がするのかなどを考えて、とても憂鬱だった。なぜなら、台北神愛教会の会堂建築の時、これらのことを私一人で処理しなければならなかったからだ。夫を含めて原住民の方々は、そういう都会で生活するためのスキルを習得していない。そこで、電話や電気の申請、備品の購入まで外国人の私が行い、経費節約のために水道の配管や電気工事まで自分でやった。その過程で怪我をしたり、感電して入院するという経験もあった。そんなことを考えていると、とても他の人のように喜ばなかった。

それでも、その牧師とホステスの姉妹たちの強い推薦に押され、夫は賃貸の契約に出かけた。私は、家賃を出してくれるというその牧師の名前で契約するものだと思っていたが、帰ってきた夫は、団体の代表者である自分の名前で借りたと説明した。

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団（日本AG）の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

そしてその日から、この牧師との連絡が急に取れなくなりました。まだ契約金も最初の家賃も払っていない。私は騙されたと思った。そうして、やっと連絡が取れて事情を聞くと、彼は、主の御心を私たちに話しに来たのであって、経済的な出資は約束していないと言った。思い起こすと、確かにそうだった。彼が出資してくれるものだと、私たちが勝手に思い込んでいただけだった。

私は崖から突き落とされた思いがして、契約を破棄するように夫と姉妹たちに懇願した。しかしそれでも、ホステスの姉妹たちの「この場所こそ新地だ」という確信は変わらず、家賃は自分たちが責任を持つとまで言い始めた。大家さんもその様子を見て、私たちが家賃を払えるか不安になったのだろう、1か月更新での賃貸契約を了承してくれた。つまり、家賃が払えなくなったらその時点で契約終了というわけだ。そして、台北神愛教会の会計からは一銭の援助もしないという約束で、月単位で借りることになった。

私はこの頃、さらに憂鬱になっていた。経済的には精一杯だったし、教会員も皆、非常に貧しい生活を強いられていた。この台北で生きていくことも難しい原住民の団体が、現教会の5倍の広さの場所を借りて家賃を払えなかったらどうするのか、などと考えていると、ますます眠れ



新しく与えられた場所

ない日々が続いた。

夫は、この超教派の牧師やバックの企業家たちが、経済的には何も支援してくれなかったことに失望していた。けれども羨ましいことに、夫は根っからの楽道家のところがあった。夫は根っからは心配しているように見えず、「できるところまでやってみよう」と乗り気になっていた。教会の礼拝も、午後のいやしの集会もますます人が増え、設備的にも限界に達していた。クーラーを全開にしても、人数なのか熱気なのか全く効かず、毎週全身汗だくで奉仕することが多く、酸欠状態で気分が悪くなることもあった。

ある日曜日、朝の礼拝が終わると、教会員全員でこの場所に行って祈る



自作のステージ

うということになった。そして新しい場所に着くと、皆の目が輝いた。原住民は皆、台北に来て窮屈な生活を強いられていたので、広々とした空間に感動したのであるか、それとも、これから起こらんとする神の御業を予感して希望を持ったのか、皆とても希望に満ちた顔をしていた。私たちは、がらんとした空間で声を合わせて賛美し、祈った。するとフロアの端にたくさん木材が積んであることに気づき、それを材料にしてステージを作ろうということになり、わずかな時間でステージが出来上がってしまった。私は、アミ族の人々のほとんどが大工の仕事に従事していることを忘れていた。本当に魔法のように、短時間で大きなステージがその場で出来上がってしまったのだ。

それだけでなく、この新しい場所

が会堂になるようにと、その日から老若男女の信徒が毎日、掃除やペンキ塗りに参加し、椅子を購入した以外は業者に頼らず、リフォーム工事をほぼすべて教会員でやりました。また家賃は、ホステスの姉妹たちが奔走し、最後は自分の家具や結婚指輪まで質に出して、契約金と1か月の家賃を準備してくれた

しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものがない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。（1コリント1：27-28）

台北でいやしの集会をする場所を準備するため、主は企業家も超教派で活躍する都会の牧師も、日本人の私も用いることはなかった。都会で暮らすスキルもお金も無い原住民のホステスや大工を用いて、台北の繁華街に祈りの家を建設されたのだ。ホステスたちが指輪まで売って家賃のために献金したことを聞いた私は、申し訳ない気持ちで一杯になったが、売った本人たちは嬉々として主に捧げていた。私は自分の体力ばかりを心配していたことを、本当に恥じた。

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第6回

「馬友友」伝道

台湾宣教師 丸山 陽子



台北の都会の真ん中に原住民の教会が手作りで祈祷センターを建て上げた、それは少なくとも私自身の人生設計には全く入っていない出来事だった。日本から何も知らずに台湾に嫁いで来て、台湾原住民の妻になった。台北で新婚生活と開拓伝道を同時に開始し、台湾で原住民たち

がどれだけ差別をされているのか、伝道者としてだけでなく、家族としても身に染みて経験した。原住民たちは少しでも良い生活と教育を受けたいことを期待して、山から台北に移住して来た。しかしそこで待っていたのは、差別とさらなる貧困だった。そんな事情もよく知らずに私は台北

で開拓伝道を始め、その後集まってきた原住民の信徒と共に、差別と貧困という大き過ぎる重荷を担うこととなった。私の祈りは彼らが台北で生きていけることだった。それで精一杯だと思った。それ以上のことなど、望むことも、夢見ることさえなかった。ところが神は、彼らを通して教会だけでなく、台北に祈祷センターを建て上げられたのである。この場所を「萬民敬拝祈祷センター」と名付けた。

教会でやっていたように、日曜の午後を利用して、いやしと解放の集会をこの新しい祈祷センターで始めた。広い場所が与えられたおかげで、酸欠状態にならずに伸び伸びと賛美と祈りができるようにになった。そして初日から、病のいやしを求める人々が来るようになった。毎週の集会で顕著ないやしがり、私たちは興奮し、喜びで満ちた。しかし、それと同時に混乱も起き始めた。賛美中に奇声を上げる人、床に倒れてしまう人などが現れた。また、集会を続けることに支障をきたすような来会者が毎週のように来るようになり、最初はどう対処していいのか分からず、とても困った。そのため、倒れる人を介護する人、声を上げる人のそばに行つて祈る人、また妨害する人を抱えて小部屋に連れて行く男性など、教会の信徒に分担してもらうことにした。

いやしと解放の集会では、ステージの上で毎週不思議なことが起きた。ある日、中年の台湾人女性が、いやしを求めて車椅子に乗ってやって来た。私たちは彼女の素性を全く知らなかったが、とにかく女性の足がいやされるように祈った。そして、祈ったその日に、女性は車椅子から立ち上がり、歩けるようになった。さらに、次週からも続けて集会に来るようになり、彼女の足はますます丈夫になっていった。ある日、夫の顔金龍牧師は、足がいやされた証をするよう彼女に促し、ステージに上げた。その中で彼女は、驚くべき過去を語った。

彼女は以前、ヤクザの愛人だった。そしてスナックの経営を任せられ、林森北路という有名な歓楽街でトップを争うほどの有名店になり、大儲けをした。ところが、近くのあるスナックが追い上げて来て、多くの客をその店に取られるようになった。彼女はヤクザの彼氏に、ライバルのスナックのママさんを消すことをお願いした。果たしてそれは実行に移され、その店のママの飲み物に毒が盛られた。その後、店の裏の溝にママが倒れているのも確認した。競争相手が無くなり、彼女の経営する店は盛り返したが、彼女は罪悪感からドラックを大量に摂取し始め、その後遺症で車椅子の生活になってし

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団(日本AG)の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

まった、という内容だった。私たちは彼女の暗黒の過去を聞いてとても驚き、神の救いの御業に感動した。

その時、さらに驚くべきことが起きた。教会員の春香姉妹(第2回に掲載)が前に出てきて、「毒を盛られたのは私です」と告白したのだ。私たちは目の前で起きている事態が、すぐには把握できなかった。毒を盛られた春香は、瀕死の状態ではらく溝の中に倒れていたものの、店の従業員に発見されて命が守られていたのだ。二人は、ステージ上で共に過去の罪を悔い改め、先に救われた春香が、自分を殺そうとした女性のために祈った。私は、その光景を決して忘れることができない。春香姉妹は現在、24時間の祈りのリーダーを務めている。

このような御業が毎週のように起きたため、私たちはさらに多くの人に来て欲しいと願うようになった。新しい場所は祈祷センターなので、超教派的に用いていたこうと、いろいろな教会を訪ねてお誘いした。午後の集会でもあり、礼拝を終えた牧師やクリスチャンが訪れてくれたが、あまり定着はしなかった。次に、信徒たちに知り合いのクリスチャンを誘うように促してみたが、原住民の家族や親戚はほとんどが遠く離れた山にいて、知り合いも台北にはあまりいなかった。せつかく完成した

祈祷センターに、どうやって人を招けばいいのか、皆が悩んでいた。

そんなある日、夫が「馬友友」という方法を考え出した。「馬友友」(Ma Youyou)は台湾が輩出した世界的なチェリストである。この人の名をもじって、「馬路」(中国語で道端)の「友友」(友達の友達)、つまり道端にいる人と友達になって集会に連れて来ようという運動だ。日本では「路傍伝道」だ。原住民は職場や知り合いから差別されているので、道端の見ず知らずの人に伝道する方が、ずっと気楽なのだ。

それで、全員が小グループに分かれて、毎日道端に出て行くようになった。ホステスの姉妹たちはスナック街と主婦が集まる市場街へ、ホステスの子供たちは「台北の竹下通り」と呼ばれる西門町に繰り出して行った。彼らが「馬友友」伝道を開始してから、道端から誘って来た慢性病の人々、身体に障害を持っている人々、道端でパフォーマンズをする若者や不良青年、ホームレスの人々までが続々と集会に来るようになった。

「すると、家の主人は怒って、そのしもべに言った。「急いで町の広場や路地に出て行って、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たちをここに連れて来な

さい。」しもべは言った。「ご主人様、お命じになったとおりにいたしました。でも、まだ席がありません。」すると主人はしもべに言った。「街道や垣根のところに出て行き、無理にでも人々を連れて来て、私の家をいっぱいにしなさい。……」(ルカ14:21-24)

祈祷センターの働きが始まって、集まるだろうと期待していたクリスチャンたちは、最初は大勢来たもののやがて少なくなり、「馬友友」伝道による道端で誘ったいろんなハンデを抱えた人々が来るようになった。それらの人々は、体の病気だけでなく、心の病気や特に家庭の崩壊に苦しんでいた。そして、賛美の中で濃厚な主の臨在に触れ、多くの未信者が涙を流しながら前に出て、主を受け入れていった。

集会の内容も、当初はクリスチャン向けのメッセージや賛美だったが、ほとんどが未信者の集会になったため、賛美も未信者向けのものに少しずつ変わり、メッセージも証が中心になった。また、西門町にいたストリート・パフォーマーの若者たちもこの集会に参加しはじめ、集会のプログラムにもダンスやラップが加わるようになった。初めて参加する人たちは、プログラムだけを見るとキリスト教の集会には思えなかったようだが、招きの時間になると皆が頭

を垂れ、ある者はひざまずき、本人もなぜだか分からず泣いているような姿がいつもあった。

私は、問題を持つ人ばかりが集会に来ることに当初抵抗があったが、未信者の人たちが前に出て涙を流している姿を見ると、この人たちは確かにイエス・キリストに招かれて来たんだという、強い確信と感動が与えられた。私の役割は、ステージ上での夫の補佐役と、問題を抱えてく



若者のために祈る

る未信者や求道者の交通整理をことだった。また、集会が混乱しすぎないように、時間が長くなりすぎないようにと心がけること(とても日本的!)も私の役割だった。そして予想通り、私は集会が終わるたびに疲労で寝込んでしまった。回復に三日ほどかかる週がずっと続き、私はあまり人が来ないで欲しいと願うまでになっていた。

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第7回

TANKの救い

台湾宣教師 丸山 陽子



萬民敬拝祈祷センターが完成し、毎週日曜日の午後、いやしと解放の集会が行われるようになった。「馬友友」伝道では、病のいやしを求めてくる人や、家庭が壊れている若者たちが次々と集まるようになった。神愛教会のメンバーは、急に人が増えてしまったために、彼らにどう対

処していいか分からず、私も彼らを教育・指導する時間もなかった。私自身も限界を覚えていたある日のこと、祈祷センターで救われた一人の青年が、私のところに相談に来た。彼は元ヤクザで、背中に大きな鬼の入れ墨をしていた。彼は夜になると体の自由がきかなくなり、ほと

んど眠れないという悩みを抱えていた。私はもしかしたら彼の背中への入れ墨が原因ではないかと思い、彼を呼んで夫とともに入れ墨の上に手を置いて祈った。すると、入れ墨が急に盛り上がったかと思うと、祈っている目の前で腫れが引いていった。その後、彼は少しずつ眠れるようになり、毎日教会に来るようになった。その彼がある日、居酒屋で芸能人と出会った。この芸能人は原住民出身の歌手で、以前は非常に人気があったが、ここ数年はテレビでも姿を見なくなっていった。元ヤクザの青年は、この芸能人が居酒屋で酔い潰れている姿を何度も目撃してかわいそうに思い、伝道して祈祷センターに連れて来てほしいかと私に尋ねてきた。

最初の態度から、たぶんもう来ないだろうと思ったが、翌週にも来会した。この時、私は彼に声を掛けた。それは芸能人としてではなく、一人の求道者として、祈りの課題はないかと訊ねた。すると彼は、とても小さな声で、身体の調子が良くないこと、頭の手術をしたばかりであることを話してくれた。私と夫は、彼の体のために祈った。この日から彼は、毎週祈祷センターの集会に来るようになった。彼の変わり果てた姿を見て、集会の出席者は誰もが申し合わせたかのように、彼が芸能人であったことを口にしなかった。彼を思いやうっての態度だった。

それから彼は、長い時間をかけて少しずつ自分の人生について語ってくれた。彼の芸名は「TANK」と言った。小さい頃から音楽が大好きだったが、家が貧乏で、家計を助けるために高校生の時からパブで歌っていた。その頃、芸能プロダクションに見出され、芸能人になった。独自の歌唱法と作曲の才能で、ドラマの主題歌を3曲も歌い、新人でありながらミリオンセラーとなり、台湾の音楽大賞にもノミネートされた。

しかし、最も売れっ子の時に突然お姉さんを心臓病で亡くし、心のバランスを崩してお酒に溺れるようになった。その結果、ひどいアルコール中毒になって、テレビの生放送中に体調不良となり、その様子が放映

PROFILE

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団(日本AG)の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

されてしまった。以来、歌うことが恐怖となった。さらに、泥酔して転倒したことで脳内出血を起こし、とても危険な開頭手術を終えて退院したばかりだった。そんな人生のどん底の時に、彼は集会に導かれた。そこで歌われる賛美を聴いては、涙を流していた。

数か月が経って、夫の顔金龍牧師はTANKに一つの提案をした。それは、私たちの教会のワシップチームの音楽指導だった。この提案が功を奏し、彼は毎週ワシップの練習に参加するようになった。大好きな音楽を通して、彼の心と体はみるみる回復していった。

TANKが救われたことと彼がワシップチームに関わることを通して、私たちの賛美の音楽レベルは格段にアップし、チームのメンバーも祈禱センターに来ている若者たちも俄に活気づけられた。そして、ワシップチームを指導している私にとっても、音楽性が高い賛美に常に触れることができるのは、大きな慰めであった。実は私も中学生の時からプラスチックバンド部に属していて、歌は上手ではないが音楽がとても好きな人間である。当時、心身の限界から人に来て欲しくないと思っていた私にとって、ようやく喜びが湧いてくる出来事だった。

その後TANKはワシップチームの一員にもなり、自作の賛美をた

くさん作るようになった。もともとワシップチームの原住民のメンバーは皆、音楽の才能があり、TANKの作曲した賛美を皆で歌っては録音するようになった。自作のCD数枚が、いとも簡単に出来上がってしまった。

そんな頃、私たちは祈る中で、彼がもう一度芸能界に復帰して、多く



クリスチャンになって神を賛美するTANK

の人に彼が作った賛美を聴いてもらえたら、という思いが与えられるようになった。そのことをTANKに提案すると、彼は猛然と反発してき「二度と芸能界の恐怖を味わいたくない!」と私に訴えた。しかししばらくして、彼は私の語りかけを受け、主のために「芸能人になると、自分から申し出てきた。」

彼が芸能界に復帰するためにどう

したらいいのか、私には皆目分からなかったが、彼がそう言い出した途端、いくつもの事務所が連絡をしてきた。芸能プロダクションにとって彼の存在は未だ高い価値を保っていたのだ。その後私は、芸能界には危険な要素が多いことを身をもって知ることになる。結論から言うと、三回ほど騙されてひどい目に遭った。そして結局、外のプロダクションには任せず、教会で彼のマネージメントをして芸能界復帰を支援することになった。

こんなとき、教会の原住民メンバーの楽天的な性格は、本当に慰めになる。「できる。できる」と皆も大いに乗り気になった。前の芸能事務所所が彼の復帰をすでに宣言してしまっていたため、TANKの復帰記念コンサートを台北の有名な会場で、教会主催で行うことになった。もしチケットが売れ残ることがあれば、教会員で協力して売りさばく手はずになっていた。しかし、発売と同時に何秒かで完売し、教会員が観客として入れないという事態になった。

それでも、コンサートの裏方の仕事は全て教会員が行い、バックダンサーやバンドも教会で救われた若者たちが担当した。復帰コンサートで歌われた曲は、一見セキユラーの歌に聞こえるが、実は神を賛美する曲であり、歌の合間には彼の復帰の経過の証や、原住民の子供たちのゲス

ト賛美などを挟み、手づくりのプログラムとなった。そして、ステージ上のTANK本人も、彼の復帰を期待していた観客も、感動で涙を流すようなコンサートになった。

私はステージの袖でインカムを付けて全体の流れを指揮しつつ、コンサートの様子を祈りながら見守っていた。それはまるで伝道集会を開催しているようで、心の中で「主よ、聴いている方々を救って下さい。」このコンサートを捧げます。主が喜んで下さいますように。」と祈った。そして、それと同時に、壁の無い教会というのはこのようなものではないかと考えていた。必ずしも会堂で聖書を開いていなくても、神の栄光が現れる所に「教会」は存在する。TANKという芸能人との出会いを通して、主がそのことを私に教えてくださったような気がした。



TANKと共に

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第8回

「精鷹出列」開催

台湾宣教師 丸山 陽子



祈禱センターでは様々な課題のため祈っているが、台湾全土の原住民のために祈る時には、特に皆の心が熱くなった。首都・台北には私たちがのような原住民教会はほとんどないが、山岳地帯には小さな原住民教会が数多く存在している。その多くは、戦前に英国やカナダの改革派の

宣教師たちが熱心に宣教して建てた教会である。原住民の村には仏教など他の宗教が入らず、キリスト教のみが布教に成功した。特に医療を通しての伝道が功を奏して、どの村にも教会が建った。
しかし、戦後になって多くの原住民が仕事や教育を求めて平地に降り

てきてしまったため、山の教会の会員数も減ることとなった。特に若者がなくなり、牧師を養う経済力がなくなった教会が非常に多い。私たちの教会のメンバーは山を故郷としてるので、山の教会の状況をよく理解しており、とても心を痛めていた。

そんな時、主は様々な事柄を通して、この祈禱センターの働きは、自分たちの教会を建て上げるためだけではなく、台湾全土の原住民教会のために奉仕すべきだという思いを強く与えてくださった。その頃、漢民族の映画監督が「セデック・バレ」という映画を発表した。監督は熱心なクリスチャンで、原住民のセデック族が日本の統治に対して蜂起した「霧社事件」を題材に映画を制作した。これまで原住民を主題とした映画は話題に上ることさえなかったが、この映画は大ヒットし、台湾のオスカー賞も獲得した。

そんな社会情勢からも大いに刺激を受け、私たちは「原住民教会の全国集会」を開催できなかつたかと思えた。しかし、原住民は十六部族に分かれていて、文化も言葉も違う。以前は縄張りや争う敵同士で、一緒に集まることも困難だった。男女の地位も部族によって様々で、一致することは至難の業である。私たちは台北での15年の原住民伝道を通して、それを肌で感じてきた。

ただ、共通点も多くある。長年人種差別を受けてきたこと、霊的に鋭い感覚を持つ人が多いこと、などだ。それらの共通点を手がかりに、何とか一緒に集会ができないものかと模索した。そこでまずは、牧師だけなら一緒に集まれるのではないかと考えた。私たちは、メンバーで手分けをして、原住民の牧師たち一人ひとりに連絡を取った。

しかし、結果は散々だった。夫は原住民牧師の中ではまだ若手だったし、山の教会のほとんどは改革派に属しているの、ペンテコステ派の背景を持つ私たちはほとんど門前払いだった。それでも、根気強く一つ一つの教会を訪問した。訪問する際は近くの食堂を予約し、私たちが接待をして話をした。体力や経済、そして多くの時間を犠牲にしなければならなかった。

そんな活動を半年ほど続けて、ようやく山の牧師たちが牧会の悩みなどを話してくれるようになり、少しずつ仲間に加わってくれるようになった。そして、数人の牧師で「精鷹出列」というネットワークを結成した。「精鷹」は中国語の「エリート」という言葉と発音が同じで、「鷹」は日本語の「驚」という意味。原住民は霊的な驚のような存在だからだ。また「出列」は、原住民の言葉で狩りに出かける時の雄叫びである。「驚のようなエリート原住民よ、立ち上が

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団（日本AG）の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

れ」という意味を込めた。この名称を見るだけで、私たちの心は情熱で震えた。

そしていよいよ、2014年6月に原住民牧師の集會「精鷹出列」を開催することが決まった。全体で1000人の出席者が与えられるように祈った。ただ、祈祷センターは広さとしては700人を収容できるものの、椅子が足りず、大きな集會をまかなう音響設備も無かった。原住民牧師のための宿泊場所も必要だし、もちろん食事も用意しなければならぬ。経済的な余裕のない私たちに、それは困難なことと思えた。

そんなある日、私はセンターの祈祷室で、祈りのリーダーの春香姉妹ともう一人の姉妹の三人で、「精鷹出列」開催のために祈っていた。しばらく祈っていると、突然大きな地震が起きて、祈祷センター全体が揺れた。三人とも驚いたが、地震はすぐに収まったので、引き続き祈り続けた。そして祈り終わった時、私たちの中に、「主がこの集會の必要を何とかしてくださる！」という強い確信が与えられた。

その後、教会に帰って先ほどの地震の震源地を調べたところ、何も出てこなかった。不思議に思っただけのスタッフに尋ねると、「地震なんか無かったよ」との答えだった。するとその時、私の携帯電話が鳴った。ある音響会社の社長さんから

だった。彼は電話の向こうでこう言った。「最近、神様に語られたので、あなたがたにプラスチック製の椅子300脚と、1000人用の音響設備を無料で貸し出します。」私はそれを聞きながら、先ほどの地震が主が祈りを聞いてくださったしるしであったと理解した。

教会のものと合わせて700脚の椅子と音響設備は揃った。食事は、信徒たちが大きなガスコンロを階段の踊り場に置いて料理してくれることになった。宿泊はセンターの床にマットを引いて、寝袋で寝てもらったことになった。台北という都会の真ん中で、原住民の村の生活を再現したような集會となった。

集會は、人数の目標を立てただけで、具体的な目的は定めないうちに決めた。なぜなら、原住民と一緒に集まって主を賛美することそのものが目的であって、その過程で何が起きるか、またどういふ結果になるかはすべて主にお任せしようと考えたからだ。

集會当日、台湾全土から各部族の牧師、伝道師、長老などが色とりどりの民族衣装を身にまとって集まって来た。主催者の私たちは、1回の賛美リードを担当しただけで、あとはすべて裏方にまわり、できるだけ多くの方に賛美リードやメッセージを依頼した。原住民による原住民のための集會は、史上初めてのこと

だった。

集會には、主要9部族が集まり、1日平均700人、全体で1000人が集まった。3日間で6回のメッセージがあり、それぞれの部族の牧師が、困難な状況を分かち合いながらも主にある希望を力強く語った。賛美奉仕では、各民族のメロデーと母語での賛美があり、どの部族も素晴らしい歌声で、私は感動で何度も涙が流れた。



あてやかな民族衣装で賛美する原住民クリスチャン

集會の中では、「祈り」に多くの時間を注いだ。原住民同士の長い争いや殺戮の歴史、漢民族に対して恨みを抱いていたことを皆でひざまずいて悔い改めた。そして、原住民が差別に負けずに主に従い、酒などに頼らずに清い生活を送れるよう、心を合わせて祈った。

「和解」や「宣教」といったテーマを掲げていないにもかかわらず、一つ

に集まって心を合わせて主を賛美し祈る中で、集會は明らかに一つの方向へと進んで行った。それは、「原住民が差別されてきた歴史には意味がある」ということだった。差別されてきたことをただ否定的に捉えて、差別が解消されるために祈るだけではなく、むしろそれを、これから与えられる大きな使命を達成するために通るべき道だったと理解するようになった。そして、その使命と召しに応答しようという思いに、すべての部族の牧師たちが心を合わせるようになった。

そこです。原住民だけではなく、台湾全土のリバイバルのため、日本を含む東アジアのリバイバルのため、さらには同じような文化を持つ東南アジアの国々のためにも祈った。その中で、「原住民の祈りは特に聞かれる」という強い確信が与えられた。それは、差別という運命を共に受けてきた者同士の大きな確信だった。最後に、このような集會を毎年行うことと、世話役を務めるリーダーが今後も各教会を訪問することを約束して集會は終わった。

集會を無事に終えて、夫も祈りのグループの面々も、勇士が戦いを終えたような自信に満ちた顔つきになっていた。私は、このような素晴らしい人々の一員として、歴史的な出来事を目撃者にさせてくださった主を、心から崇めた。

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第9回

聖霊による奇跡：共同生活

台湾宣教師 丸山 陽子



私はペンテコステ系の教会で信仰を持ち、育ってきたので、新約聖書の「使徒の働き」にとっても興味があった。特にイエス・キリストの弟子たちが聖霊に満たされて（使徒の働き2章）からの生活や宣教の様子を見るたびに、この書に記載されている神の御業が私たちの宣教の中でも実

際に起きて欲しいと心から願っていた。異言を語ること、預言的な話を聞くこと、奇跡やいやしにも非常に興味があった。そして、20年にわたる台湾原住民への宣教の中で、それらの御業は今でも実際に起こることを、この目で見て体験してきた。そして、私が使徒の働きの中でこ

うした奇跡に勝って最も興味を持ったのは、聖霊に満たされた信徒同士が、毎日一緒に生活していたということだった。

そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていった。そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって多くの不思議とするしが行なわれた。信者となった者たちはみないつしよにいて、いっさいの物を共有にしていた。そして、資産や持ち物を売っては、それぞれが必要に応じて、みなに分配していた。そして毎日、心を一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。

（使徒2：42-47）

私は1966年に山梨県の甲府市で生まれた。幼い頃から常に寂しい感情を抱いていて、それはクリスチャンになってもなかなか拭えなかった。家庭は、父が公務員で家族には非常に厳格で、母は逆に芸術家で優しい性格だったが、夫婦仲は悪かった。私は、家族からの愛情不足もあってか、小学校の頃はいじめられた子だった。幸い、中学から大

的な性格になった。

しかし、長くうつ病を患っていた母が、私が大学生の時に自殺をしてしまい、私はその後クリスチャンになったものの、そのショックもあって再び人間関係がうまく結ばれなくなった。それは神学校に入ってから引きずり、このままでは人と関わる伝道者などできないのではないかと不安を抱え、その状態で卒業して台湾宣教に赴くこととなった。

台北での開拓伝道は、教会と自宅が一緒の状態ですスタートし、カルチャーショックも重なって、精神的な負担が限界を超えそうな時が何度かあった。開拓5年目ぐらいで、ようやく教会と自宅が別々になったが、そのプライベート空間には誰も入ってきて欲しくないという張り詰めた精神状態になってしまい、それが何年か続いた。

しかし、主の慰めと時間の経過のお陰で、私は少しずつ台湾の生活に慣れ、教会員とも何とか良い関係を結べるようになった。

そんな時、教会で学童保育が始まり、教会内に原住民の子供や学生が出入りするようになった。彼らは皆、家庭で受けた傷や差別によるいじめによって、心の傷を抱えていた。学校に行けない子供たちもたくさんいた。その子供たちの姿を見て、私は自分の幼少期を思い出し、何とかして

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団（日本AG）の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

あげたいといつも思っていた。しかし、その頃の自分は、異国での生活の困難さ、違う文化を持つ夫と夫婦や家族になることの難しさを強く感じていて、それ以上誰かのお世話をすることなどできないと、ずっと諦めていた。

そんな折、用事で日本に帰国した際に、ある福祉施設を訪れる機会が与えられた。そこは「たまり場」と言って、不登校の学生が昼間通える場所だった。そこで、施設の職員から日本にはかなりの数の不登校の学生がいることを聞かされ、とても驚いた。「たまり場」は、そんな若者たちがストレスなく集まれる場所です。私はこの施設の存在にいたく感動し、このような活動が台湾の原住民に対してできないかと考えるようになった。

台湾に帰った後、教会の一室の事



原住民の子どもたちへの学童保育

務机と椅子を全部外に出して、マットとソファを置いた。そして、たくさんの中古の楽器を人からもらって室内に置き、パソコンで自由にゲームもできるようにした。原住民の学生が自由に来て時間をつぶせるように、時間の制限を設けず出入り自由にした。

最初は、一人の女子学生が来た。その後、彼女が同じ中学の友達を連れて来て、たくさんのお住民の中学生が一日中入りびたるようになった。午後5時から30分ほど一緒に聖書を読む時間を持つようになった。さらに、6時から持ち寄りと一緒に夕飯も食べるようになった。

中学生たちの多くは、親が台北にいなかったり、いても夜の仕事を家にいないことが多かった。そのまま泊まりたいという学生もでてきたので、教会のトイレに簡易シャワーを付けて、彼らが泊まれるようにもした。夕食も、大鍋で全員の分を作って食べるようになった。

その頃から、私はこの学生たちと共にいる生活を通して、他の人々と共に生活することの楽しさを少しずつ感じるようになっていった。学生たちは大人と違って、正直で屈託がない。また、私の幼少期と同じような心の寂しさを抱えていた。彼らと一緒に過ごすことを通して、神様は私の幼い頃の寂しい気

持ちを癒やしてくださるようになった。ソファに座って学生たちの話を聞いて励ましていた時に、実は幼少期の自分に話しかけていたのではないかと、今は思う。

もちろん違う人種、違う性格の者が一緒にいることは、決して楽しいことばかりではない。喧嘩や嫉妬は絶えず、反抗期ゆえの争い、恋愛にまつわる問題などが毎日のように起きた。しかし、毎日必ず行っていた聖書を読み祈る時間を通して、反省や和解に至ることができた。そうして私たちの教会は、台北の原住民の「たまり場」になることができた。

その後、教会だけでは皆が寝泊まりできなくなったため、下の娘が中学生になってから、牧師の自宅を開放し、また同じビルの部屋をいくつか借りて、学生たちを泊めるようになった。いわゆる青年たちの寄宿舎生活が始まったのだ。現在、20名以上の中学生以上の青年たちが我が家



共に生活する喜び

と同じビルの部屋で一緒に暮らし、我が家だけで8人の青少年が寝泊まりしている。皆が貧しいので、衣服ももちろん着回しで、食事も一緒に作った方が安上がりなので毎日一緒に悩みは洗濯物で、あまりにも多いので乾かない。靴下などはいつも混ざり合ってしまう、対の靴下を探すのが一苦労だ。

以前の私の姿を振り返ってみるときに、人と関係を結ぶことさえ難しいような状態から、他国の青少年と一緒に暮らすようになることは、これこそ聖霊が私に降^{くだ}ってきた奇跡だと感じている。そして、この活動をすればするほど、あの初代教会の宣教の力は、聖霊によって愛し合う共同生活の中から生まれたものだと確信が与えられるようになった。現代は、孤独が蔓延する世界である。個人主義の主張によって、多くの人が共に住む喜びを放棄してしまつた。結果、子供たちやお年寄りが孤独で苦しむようになった。人は決して一人では生きていけないのだ。神は教会を建て上げることを通して、私たちに新しい家族と家庭を与えてくださった。そこでキリスト者が共に生きることを通して、具現化した神の愛を体験できるようにしてくださった。こんなにも単純で、そして最も大切なことを、私は台湾の原住民の方々との共同生活の中で教えられたのである。

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第10回

山地宣教体験ツアー

台湾宣教師 **丸山 陽子**



宣教師という仕事は、現地の人の伝道のために働くだけでなく、支援して下さっている母国の人々に支援の結果を伝えることも非常に重要な任務である。その一環として、毎年日本のクリスチャンに宣教の現場を見ていただけるようなツアーも実施している。それぞれの宣教師によっ

てツアーの内容は違うが、私たちの宣教地では、日本の方々だけで現地に行くのではなく、台北の原住民の若者も一緒に参加できる内容を企画している。

毎年8月の初めに約1週間をかけてこのツアーは行われる。前半の3日間は日本人約20人と原住民のユイ

ス70人ほど、合計100人ほどで原住民が住む山に宣教キャンプに行く。このキャンプには非常に大切なもう一つの目的がある。それは、台北という都会で育った原住民の若者たちが、原住民の文化や生活を忘れないようにするためのもので、キャンプの期間はできるだけ伝統的な原住民の生活様式が体験できるようにしている。原住民は狩猟民族である。山にはもちろんスパーどころか市場もない。よって日々の食物は、自分たちで確保しなければ生きて行けない。そのような原住民の生活力と知恵を、都会で育った若者にも引き継いでほしいのだ。そのツアーに日本から来たクリスチャンにも一緒に参加してもらい、原住民の生活と文化の紹介とともに、実際にその生活を体験しながら、伝道ができる内容となっている。

原住民が住む山岳地帯の村のほとんどが台北から車で5時間以上かかるため、ツアーの時のみ台北から3時間以内で着くタイヤル族の村に行くことが通例である。そして、このキャンプの目玉の行事が、豚を自分たちで屠(ほ)って一緒に食べるプロگرامだ。原住民のどの部族にも、それが伝統行事として残っている。以前は豚ではなくイノシシを屠っていたが、近年はなかなかイノシシが獲れず、購入した豚で代用されている。私は結婚当初、この行事に参加し

て仰天した経験があった。しかしその後、この行事が彼らにとって非常に大切な文化であることを知り、そこから積極的に学ぶことにした。そして、この行事を経験すればするほど、原住民にとって欠かすことのできない行事であることが分かった。それは、皆でどうやって生きていくかという知恵が、その中にいっぱい詰まっているからだ。

イノシシ(今は豚)は、村の体力のある若者たちが何日もかけて山を登り、狩りをして獲ってくる。村に戻ると、その肉は村人に平等に配分される。特に年配者には美味しく、高級な部位が配られる。障害者にも、狩りに参加できない人にも、肉は配布される。部位や量は、貰う人によって細かく決められているようで、それを間違ったりすると大きな衝突が起こるようだ。実際私は、肉の分配の間違いで言い争いになっているところを何度か目撃したことがある。

私は、この豚を屠る行事の意味を知って、強い感動を覚えた。特に年配者に最も高級な肉が配られるとは、これこそ私を含め、日本人がすぐにも学ばなければならない文化だと感じた。狩りをした人だけが独り占めしない、弱い人にこそ良い肉を配る。この原住民の精神は、山から下りて都会に住んでいる人々にも受け継がれている。そんな彼らの共同生活のルールの原点が、この豚を屠る

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団(日本AG)の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。



日本からの宣教チーム

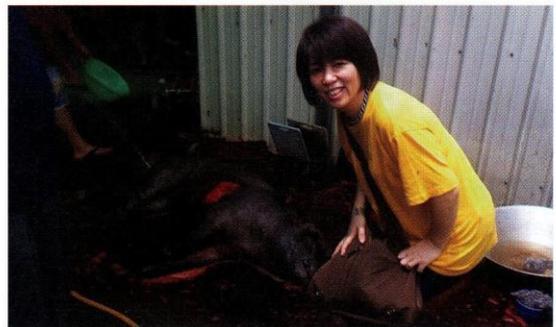
儀式にあったのだと知った。そこで、この文化的行事を、台北で育った原住民の若者にも、また日本人クリスチャンにも体験して欲しいと思い、山でのキャンプに採り入れることにした。

日本人グループは、山に着くと、まず生きている豚が広場につながれていることにはびっくりする。豚を屠る時間が来ると、村の長老か牧師が、まずこの行事のためにお祈りをする。豚のために祈るのではなく、狩りで食物が与えられたことへの感謝の祈りだ。そして、長老が「番刀」と呼ばれる原住民特有の山刀で豚の心臓を一突きにし、息の根を止める。それを、原住民の若者たちが尊敬のまなざしで見つめている。なぜなら、こ

の作業には高い技術と勘が必要だからだ。豚が絶命すると、毛を焼く作業に移り、各部位に解体されていく。肉を切る仕事は、男性にしか許されていない。豚の各部位が生物の教科書の解剖写真のように露わになると、皆の目が興味津々になる。男性が全ての内臓を切り分けて、大きな金たらいに入れると、ここからやつと女性が作業に参加する。全ての内臓の処理をするのが女性の役目だからだ。

私は新婚3日目で、この作業をする羽目になった。台湾の原住民の村に行けば、私は宣教師ではなく、彼らの嫁であるからだ。原住民は日本と同じく、嫁には結構厳しい。その日は豚の大腸を洗う羽目になったのだが、屠ったばかりだったので、まだ温かく、想像したよりも長かった。その内容物(排泄物)をきれいにし出して、食べるのに良いように3センチぐらいに切っていくのだが、年長の婦人たちは上手にまなこで手に入らないように切っていた。しかし私は、何せ初めての経験でもあり、腸を処理した後の手の臭いがとんでもないことになっていた。

しかし今では、この腸が美味しいホルモンになることが想像できて、楽しく洗うことができる。そんな私の姿を、日本のクリスチャンたちが驚きの目で見つめている。彼らの反応を見て、宣教師として少し誇らし



豚を屠って食べる

く思ったりする。

豚の肉は、程よい大きさに切られて炭火の上で香ばしい焼肉になる。タレを付けずに塩だけで食べると、肉本来の味がして本当に美味しい。この時になると、豚を屠る時にはおびえていた日本の参加者も、活き活きとして夕食の焼肉に舌鼓を打つようになる。

この行事を終えて、日本の参加者も原住民の若者も、当たり前のように気がつく。それは、生きていくということが、他の命を犠牲にして成り立っているという事実だ。この行事を通して、食べ物は無駄にしないといけないことを強く学ぶ。また、山で食にありつくには、皆で協力しなければならぬことも経験する。このような学びは、日本人にとって

も、原住民の若者にとっても、非常に大切なものとなっている。

このキャンプでは、豚を屠ること以外にも、原住民の踊りや手芸なども学べる。そして3日も原則的に入浴無したが、2日目に川で洗礼式があるため、そこで全員水浴びができる。午後は村の家々を訪問し、野外で二晩行われる伝道集會に誘う。夜の伝道集會では、日本人参加者は浴衣を着てもらい、賛美や証などの奉仕をしていただく。そして、山岳地帯の原住民たちが純粋に信仰を受け入れる姿を見て、皆とても感動する。

このツアーは年々参加者が増え、噂を聞きつけてマレーシアや香港、シンガポールなどからも参加者が与えられるようになった。なぜなら参加したメンバーが、その後献身するケースがたくさん起こされているからだ。

このツアーでは、異文化での生活や伝道、非常に限られた環境の中で他の人と助け合いながら生活することを学ぶ。また、山岳地帯の原住民の方々の純粋な性格や信仰に触れて、海外の青年たちも、また都会の原住民も大きなインパクトを受け、宣教をすることへの喜びと希望を見出し、裏方で準備をする私たちに、とっては大きな犠牲を払う宣教体験ツアーだが、その実りは非常に大きい。

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第11回

高砂義勇兵

台湾宣教師 丸山 陽子



私は、台湾に嫁いで来たことで、初めて台湾と台湾原住民について知った。日本から非常に近い外国に、このような多民族国家があったことも、日本がこの国を50年も統治していたことも、恥ずかしながら結婚するまで全く知らなかった。「夢を通して私の結婚を見せて下さった神だ

けを信じて、行先や将来の計画も全く持たずに台湾に嫁いで来た。その台湾原住民がとても特殊な民族であり、差別されていることを知り、またその人々と共に生活することを通して、原住民の素晴らしい人間性と、差別されてきた苦しみを、同時に体験することになった。また、原

住民と日本人が実は歴史的に非常に深い関係にあったということも、その後知ることとなった。

夫の顔の父、私の舅は、第二次世界大戦の時に「高砂義勇兵」であった。台湾は過去、日本の植民地であったので、戦中、台湾の男性は「日本人」として戦いに駆り出された。そして、原住民もちろん例外ではなく、志願兵として主に南方に派遣されることとなった。植民地時代、日本の教育を受け、日本精神を教え込まれた舅は、当然のごとく志願した。

この話は、私が結婚した当初は全く知らなかった。しかし、舅と共に山地伝道に行ったり、故郷の山に帰ることが度々ある中で、ある出来事に遭遇した。それは、故郷の南山に共に帰郷した時のことだった。舅の元を、村に住む一人の友人が訪ねて来た。そして二人は、タイヤル語と日本語を交互に使って昔の話を始めた。日本語の部分は私も聞き取れるので、そばで二人の会話を聞いていた。どうも、戦争の時の話をしているようだった。

しかし、話しているうちに、私の面前で二人の老人が話しをしながら泣き始めた。私はその様子を見ながら、二人が話している内容が尋常ならざる事だと感じた。そして、普段は陽気で気丈な老人二人が泣き伏せてしまうほど、舅とその友人がかつて非常に悲惨な経験をしたであろう

ことは見て取れた。そして、その友人が帰宅してだいぶ経つてから、私は恐る恐る、何があったのかを舅に日本語で尋ねた。「高砂義勇兵」という言葉を、私はその時初めて耳にすることになった。

舅の泣いている姿があまりに衝撃的だったため、その理由を知りたいという思いで「高砂義勇兵」について調



高砂義勇兵として戦った義父(左端)

べ始めた。そして、その歴史的出来事は、私の想像をはるかに超える悲惨な内容であることを知るに至った。舅は1943年に高砂義勇兵に志願し、敗戦までソロモン諸島のブーゲンビル島に派遣された。島に派遣された時には、日本軍の敗戦の色は濃く、連合軍はすでに陣地を構築しており、日本軍は決死の攻撃を続けていた。制空権を敵に奪われたため、島への補給が停止し、残された日本兵は自給せざるを得なくなっていた。そんな戦争の末期的な時期に、舅

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団(日本AG)の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

は島に派遣されたのである。日本軍はすでにひどい飢餓状態に陥っており、狩猟の経験があった舅は島のジャングルでも動物を獲ったり、野草や薬草などを見分ける力や知恵があったため、補給が途絶えても、それらの物で命を繋ぐことができた。また、飢餓や赤痢に苦しむ多くの日本兵を助けて、数少ない生き残った兵士たちと一緒に台湾や日本に帰れる日を待っていた。

そのような日々の中、多くの日本兵や原住民兵が舅の周りで次々と飢餓や病気で死んでいった。それは全くの極限状態であったようだ。それでも舅は、自暴自棄になることなく、帰る日を待った。しかし日本は、そんな状態の兵士全員に玉碎命令を出した。それでも舅は、幸いに自力で島から台湾に帰って来ることができた。

また舅が島に派遣された頃、日本の英雄的存在であった山本五十六海軍大將が、ブーゲンビル島を訪問する際にアメリカ機に空中で狙撃され、ジャングルの中に墜落した。その捜索部隊として舅が従事する高砂義勇

私たちは歴史の中に生かされている。神はその歴史に働いておられる。私たちは人間として、また日本国民として、過去の歴史で起こった様々な出来事を知る必要がある。

兵が派遣され、飛行機と遺体を目撃したことも懐かしそうに私に話してくれた。

舅や友人が従事していた高砂義勇兵は、志願兵ということで、戦後の日本からの恩給や補償は全く無かった。義勇兵の存在すら日本国民には知らされていなかった。けれども舅は、そのような日本を全く恨んでは



義理の両親

いない。むしろ、原住民を差別して人間として扱わなかった漢民族よりも、学校を建てて教育してくれた日本に感謝していた。志願兵として兵隊に行くことは、そんな日本への恩返しとして誇りさえ感じていると舅は言った。そのような話を聞けば聞くほど、私の心は痛んだ。

このような衝撃的な話を聞いて、

私は日本人として何も知らなかったことを本当に恥じた。私は戦争を全く知らない時代に生まれ育った。そして、平和であることを当たり前のようにして今まで生きてきた。けれども、そのような平和が、多くの人々、しかも外国人である台湾人や原住民の犠牲の上に成り立っていたのだ。嫁いだ家の親がかつて「日本人」であったこと、また日本人より前に出て日本のために戦い、国を守ろうとしてくれたことを知って、私は愕然とした。また、舅とその友人が私の目の前で泣きながら話していた島での戦争体験がどれだけ悲惨だったか、想像することさえ困難であった。

舅の高砂義勇兵の体験を聞いてから、私は日本人の嫁として、また日本人宣教師として、一体何が出来るだろうかと考え始めた。そして舅は、舅や多くの原住民が日本のために、日本人よりも前に出て戦ってくれたこと、極限状態にありながらも日本兵を助けたことなどを、私自身も知つてもらうことが必要だと思つた。そして、舅に会うたびに義勇兵の思い出を語ってもらった。さらに、日本で戦争のことに興味がある人を見つけては、台湾にお呼びして舅の話を書いて、台湾にお呼びして舅の話を書いていただいた。舅の話をテープに録音したり、ビデオに撮つ

たりという作業もした。

けれども、そんな中で、かなりの数の日本人から、舅や私は日本から賠償金をたくさんもらいたい。がために嘘を言っているのではないかと、という誹謗中傷を度々浴びせられることになった。しかし、舅も私も、賠償金をもらうことが主要目的ではなく、このような日本統治時代の戦争中の事実を日本人が知り、戦った兵隊たちを労うことがどうしても必要だと思つていた。そして、私が日本人キリスト者として、このような環境に遣わされたのには深い意味があると思うようになった。

私たちは歴史の中に生かされている。神はその歴史に働いておられる。私たちは人間として、また日本国民として、過去の歴史で起こった様々な出来事を知る必要がある。そうして、神から離れて犯してきた罪の重大さに気づき、それを心から悔い改めたときに、国の、また民族の癒しが始まっていくのだと思う。それと同時に、他民族への尊敬や感謝も育まなければならない。

神は私を日本から召し出して、宣教師として台湾に送った。それは、伝道に携わるだけではなく、日本人としてアジアの国々に犯してきた罪と過ちを知り、その破れ目に立つて国のため、同胞のために祈るようにと、私を遣わしてくださったのだと感じている。

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第12回

被災地におられる神

台湾宣教師 **丸山 陽子**



日本ではこの30年、多くの災害が起きている。特に1995年に起きた阪神・淡路大震災と2011年に起きた東日本大震災は未曾有の大災害であった。

台湾でも、私が嫁いで来てから幾つかの大災害があった。台湾に住んで4年が経った頃の1999年9月

21日、台湾中部でマグニチュード7.7の大地震が起きた。台湾中部にはタイヤル族の村が多いが、山地のタイヤル族と全く連絡が取れなくなった。私たち夫婦は何か使命感のようなものに駆られて、状況がまったく分からない中、車で現地向かった。そして、高速道路でワール

ドビジョンの職員グループに出会い、一緒に山岳地帯に向かうことになった。



台湾の被災地での活動

被災地に着くと、報道とは異なり軍隊以外の援助は震源地まではまったく入っていないかった。民間の団体の車は、眼前の被災状況に恐れをなして、被災地の手前で全ての支援物資を道に捨てて引き返していた。そのため、被災地に入っていく国道の脇には山のように積まれた救済物資の壁が長くできていた。私たち2台のワゴン車は、それを見て少々たじろいだ。救済物資を捨てることはもちろん出来なくて、互いに励まし合いながら進んだ。原住民の山に入っていくためには震源地を通過しなければならず、崖崩れの中を大きな声で賛美しながら進んでいた。

2009年8月26日にも、原住民の山を襲う大水害が発生した。この時にも私たちは山の人々に物資を届

けるため、車を運転して同じく崖崩れの中を進んで行った。この時は2回目だったので、あまり怖いとは思わなかった。むしろ、災害の中にあっても深い神の臨在を感じた。またこの時には、私たちの教会の何人か信徒の故郷が村ごと消滅するという危機が迫っていた。幸い電話が通じ、南部の山に帰省していた一人の信徒から「裏山がもうすぐ崩れそうなので祈ってくれ。」というリクエストが届いた。台湾の空軍に所属していた彼は、電話での祈りが終わると、山地の人々を教会に集め、特に年配の人々に気を配りながら食料を調達した。そして、同村の出身の同じく空軍に属する友人二人にも連絡し、なんとヘリコプターで山の人々全員を移送し、救出した。

日本の神学校を卒業する間際に阪神・淡路大震災が起き、神学生全員で救済活動を行った経験も私たち夫婦にはあった。さらに、2011年3月11日の東日本大震災の時、私は日本で巡回報告の真っ最中であった。台湾を含めて4度目に遭遇する大災害だった。その時、北陸にいた私は、とりあえず東京に出ようとしたのだが、鉄道はすでに止まり、東京に着くまでに2日間を費やした。その後の子定は東北地方への巡回となっていた。滞在していた東京でさえも混乱を極め、交通機関も止まっていた

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団(日本AG)の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚。台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

ので、本来は巡回を中止すべきだったが、これまで3回の災害地での経験があったので、再び「行かなくては」という使命感があった。

日本人は人様に迷惑をかけてはいけないという文化がある。「世間」を大切にす文化だ。この文化は非常に美しい一面もあるのだが、災害のような非常事態では助け合いを妨げてしまうこともある。人間はそもそも完全ではないので、人は人に迷惑をかけながら生きていく存在である。迷惑をかけることを承知で人に助けを求めたり、人々を助けたりしながら共に生きていく。私は台湾の原住民の生活で、このことを学んだ。そこで、「現地に迷惑をかけるから止める」という周りの助言がありながらも、一人で東北に行こうと決意し、大きなリュックにできるだけの物資を詰め込んで出発した。

福島第一原発も爆発事故を起こし、余震もあって非常に緊迫していた時だった。日本のメディアよりも海外のメディアの方が放射能汚染の正確な情報を伝えていて、どれだけ恐ろしい放射能が放出されているかの情

報が毎日、中国語で入って来た。じつは日本が報道規制されている国であったことも、その時に初めて知った。そのため、台湾の家族や教会の人々がとても心配して折って来てくれた。

東京を出発すると交通手段はバスしかなかったが、何度も乗り継ぎをして福島と仙台の被災地に辿り着くことができた。バスに乗るとほとんどの区間で「この便が最後になりませ」というアナウンスを聞いた。何か東北に道が開かれ、導かれているように感じた。迷惑であることを知りながらも、被災地の教会を訪問させて頂き、少しばかりの物資を差し上げ、祈ることができた。そして、仙台に近い東松島市に行くと、津波で海側の町はほぼ壊滅状態であった。そして、東北の海側には今までほとんど教会が無かったことも初めて知ることとなった。その時、一つのことばがずっと心にあった。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ——それは

わざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ」
(エレミヤ29:11)

災害が起きた時に、私たちは恐れしてしまうのでなく、混乱の上におられる希望の神を見上げることが必要だと、何度かの経験で教えられた。また、困難の中では違いを越えて協力し助け合うチャンスが与えられたと捉え、実行に移すことも学んだ。

台湾では2009年から多くの教会が協力し、災害時の救援活動を行っている。その中心的役割を果たしているのが中華基督教救助協会、台湾中部地震の救済に協力したクリスチャンや牧師たちが立ち上げた団体だ。その中心メンバーは、一緒に山に入って行った元ワールドビジョンの職員たちである。彼らは台湾人のお世話好きの性格を生かして、教団教派を超えた素晴らしい災害救助活動と伝道活動を何度も展開している。

東松島の津波の被災地に着くと、前の3回の救援活動の経験と中華基督教救助協会が学んだこともあり、何をすべきかがすぐに理解できた。まずは、その地域のキーパーソンを聞き込みで探し、その人の家を掃除した。家の中は津波で流れて来た丸太と泥がいっぱいで、女性一人では何もできない状況だったが、



東松島にて

ちように近くの空港自衛隊の若い自衛官が制服を身に付けて、整列して道路のゴミ拾いをしていた。台湾は徴兵制なので町には兵士がたくさん歩いているし、私たちの教会には軍人の原住信徒も多い。自衛官とどのように接すればいいか、その経験からある程度わかった。その自衛隊のリーダーに泥の始末をお願いすると、彼らも被災地で何をしていいか具体的にわからなかったようで、すぐに快く引き受けてくれた。若い自衛官たちは、なんと私の指令で動いてくれて、あつという間に片着いてしまった。その数年後、多くの教会の協力のもと、このお掃除させて頂いた家の隣の土地に、素晴らしい教会が建てられた。神は災いを与える方ではなく、希望を与えられるお方だというみことばが、この被災地でも見ることができた。

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第13回

日本人クリスチャンへの尊敬

台湾宣教師 丸山 陽子



「日本人なのにクリスチャンなんですか？」台湾で自己紹介をすると、かなりの確率でそう言われる。台湾のクリスチャンのほとんどが日本の宣教状況を理解しているので、非常に珍しがられ、また尊敬の眼差しで見られることが多い。

私は日本から派遣された宣教師と
いう立場なので、日本の教会にも奉仕する機会が与えられている。3年に一度、日本各地の教会を回り、祈りと献金で支え続けてくださっている結果を伝えることは、とても大切な任務で、その折りに日本の教会の様子も見ることが出来る。その中で感じることは、やはり日本における

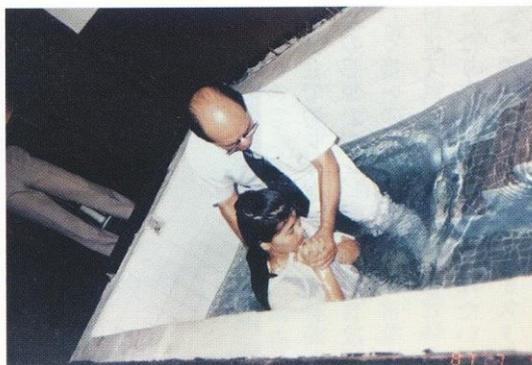
伝道の大変さだ。

私は山梨県の甲府という特に教会の少ない地域で生まれ育った。甲府は県庁所在地でありながら、ほとんどの教会が礼拝出席者は30人以下で、10人前後の教会も少なくなかった。私が生まれ育った家庭も、地域の人々も、キリスト教に対しては排他的な感情を持っていたので、教会に人が集まらないのは当たり前だと思っていた。

そんな環境の中で私は姉に誘われて教会に行き始め、救いを受けたため、信仰を持った当初から、家族や周りの人から歓迎されないことは覚悟していた。私は小学生の頃から幾つかの教派の異なる教会の日曜学校に参加し、大学生の時に母を自殺で亡くしてから聖書を真剣に読み、救われた。その時に行った教会も、人数は5人ほどで会堂も非常に古い教会だった。

しかし、牧師の真摯な態度と、礼拝で語られる真理のみことばには強く惹かれるものがあった。洗礼を受けた後は、予想通り父親から、また親戚から非常に強く反対された。大学や職場でも、信仰について語ると白い目で見られることは当たり前だった。そんな中でも、夜中にこっそり弟に伝道し、弟は救いに導かれた。しかし、弟が洗礼の決心をした時には父が逆上し、ますます私たちの信仰に反対するようになった。自

分の信仰を守るためには、家を出るという選択肢しかなかった。



洗礼式

私の信仰はそんな環境の中で育ったため、台北での開拓伝道を始めた時から「大きな教会を建てる」というビジョンは私の中にはなく、一人の魂が救われることが奇跡だと思って個人伝道に励んだ。しかし、台湾で伝道していると、現地の牧師や働き人から「あなたの教会の礼拝出席者は何人ですか？」と度々訊ねられた。私は胸を張って「5人です！」と答えたが、相手の表情に軽蔑や憐れみの色が浮かぶことが多かった。

台湾は、オランダに統治されていた時代から宣教が行われてきた歴史がある。それもあって長老派の教会が多い。その後、日本統治の時代を経て、中国から蒋介石率いる国民党

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団(日本AG)の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

がやって来たが、蒋介石夫妻はクリスチャンだった。また、1988年から2000年まで総統を務めた李登輝も、長老派に属する立派なクリスチャンである。

台湾は日本のように鎖国や迫害を経験したわけではない。民族的にも宗教好きで、南国独特の楽観的な寛容性も持ち合わせている。さらに近年は、特に台北のクリスチャンの人口比率も増えているため、大きな教会をつくるのが牧師の評価に繋がっているように感じる。しかし日本では、礼拝の出席者数のみで牧師の能力を測るということはなく、地域性を理解しつつ、どんなミニストリーでその地域に仕えているのか、といった要素も重視される。それは、日本はどの地域においても伝道の大変さは似たり寄ったりで、人数のみで測れるものではないことを互いに理解しているからだと思う。

私は非常に厳しい父親に育てられ、勉強などでどんなに努力をしても、一度も父に褒められたことはなかった。それもあってか、子どもの頃から低いセルフイメージを持っていた。それは、その後の生き方にも大きく影響し、自分を卑下したり、虚勢を張ったりを繰り返していた。そのため、人間関係や自己嫌悪で苦しむことが度々あった。

しかし台湾では、人数の件では軽視されることも多かったが、日本人

クリスチャンであるということ、また日本から派遣された宣教師であるということ、周囲から褒められたり、メディアで取材されるなどの機会も増えてきた。そんな中で、私の低いセルフイメージも少しずつ癒やされていった。

ある日、台湾のクリスチャンメディア会社から、私たち夫婦のドキュメンタリーを作りたいという連絡があった。そして二か月間、カメラが密着し、私たちの生活や伝道の様子を記録してくれた。出来上がっ



ドキュメンタリー-DVD

たDVDは、なぜか私を主人公にした作品として発売された。それは、私にとってとても意外だった。なぜならその頃、私は常に裏方に回って奉仕をしていて、講壇に立つことも希^{まれ}だった。教会開拓も、台北での様々な差別に遭遇して頓挫しているように見えていた時期だった。

そのDVDは、原住民のためにはるばる日本から来た女性宣教師がいて、日本でも台湾でも苦労続きであつてもへこたれず、けなげに生きている、という筋書きで作成されて

いた。その映像を見た時、これはまさに神様の目線で見た私の姿だと感じた。私にとって大きな励ましとなった。

日本は世界でもまれに見る伝道の難しい国である。努力をして伝道しても報われないことが多い。クリスチャンが日本人の魂を愛すれば愛するほど、特に地方においては日本の伝統的な文化や宗教の壁にぶつかり、苦戦を強いられる。クリスチャンだけでなく、日本人全体が低いセルフイメージを抱いて生きている。そういう文化の中で育っている。伝道者はますます自己憐憫に陥り、人間関係に支障を来し、あるいは燃え尽きて心が病んでしまうこともあるだろう。そんな日本の伝道者を神様はどのように見ておられるのだろうか。

しかし一歩日本を出て客観的に日本の伝道者を見つめてみると、その粘り強い信仰と清らかな品性は、海外のクリスチャンにとって尊敬の的となる。それは元々セルフイメージが低かった私が実感してきたことだ。このような評価を日本の伝道者やクリスチャンが知るならば、もっと自信と喜びをもって伝道ができるようになるだろう。他国との比較や他教会との比較の中で生きるのではなく、神の目線でその地域を見て、自分が牧会する教会を見つめることが大事なのだと思う。

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第14回

「日本人」として用いられる

台湾宣教師 **丸山 陽子**



台湾のテレビ番組を見ていると、
コマーシャルなどで日本語や日本と
関係ある企業などが5回に1回くら
いの割合で出てくる。街を歩いてい
ても、日本語の看板をあちらこちら
で見かける。台北では日系のチェー
ンストアは私が住んでいた甲府より
はるかに多い。台湾はそれくらい親

日の国である。そして、そのことを
多くの日本人が知らない。かく言う
私自身も、もちろんそのことを全く
知らずに台湾に嫁いで来た。
台湾がなぜそんなに親日なのか、
いくつもの理由がある。それは、こ
の国が50年（1895年～1945
年）ものあいだ日本の植民地だった

ことに起因している。台湾は日本の
植民地になるまでは中国の一部で
あったが、その頃はあまり開発が進
んでいなかった。その理由として、
原住民の抵抗もかなりあったようだ。
土地も資源も非常に広大で豊富な中
国が、強い抵抗勢力が存在する小さ
な台湾を、犠牲を払って開発する理
由も無い。けれども同じ島国から来
た日本人には、そんな台湾を開発す
る手だてがあった。それは抵抗する
原住民と戦うのではなく、教育する
ことだった。全ての原住民の村に国
民学校が建てられ、日本人化が進め
られた。今まで中国人から人間とし
ての扱いを受けてこなかった原住民
が、教育を受けることができるよう
になった。これは大きなことだった。
この政策が功を奏して、原住民の日
本人への抵抗は減っていったようだ。
もちろん霧社事件のように
日本人化に最後まで抵抗す
る人々もいたが、それは少
数で、ほとんどの原住民が
日本人に教育されたことを
今でもとても感謝している。

それだけではない。第二
次世界大戦が終わった後、
台湾は再び中国に返還され
たが、その時に共産党との
内戦に敗れた国民党が中国
から台湾に逃れて来た。彼
らは台湾で非常に粗暴で高
圧的な支配を開始し、二・

二八事件と言われる大規模な虐殺事
件が起きた。この事件は今でも大き
な傷を台湾に残っていて、比較的弾
圧の少なかった日本統治の時代が一
層美化される理由ともなったようだ。
そのような数々の歴史的理由から、
台湾はたぶん世界一と言ってもいい
ほど親日である。私は幼い頃からセ
ルフイメージが非常に低い子供だっ
たことは前回も触れた。また日本に
いる時は、西洋から入ってくるもの
が全ていいというイメージを、たぶ
んマスコミから植え付けられていた
日本人として誇りを感じたことは全
くなく、むしろ日本の文化や日本人
の気質を毛嫌いしていた。自分が日
本人の、特に女性として生まれてき
たことを、大きな損失だと感じてい
た。

しかし、台湾に嫁いで来たその日



台湾で日本人として生きる

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団（日本AG）の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

から一転、日本人としての私を台湾の人々がとても歓迎してくれた。特に喜んで迎えてくれたのが舅である。彼は日本統治時代に高砂義勇兵という志願兵でもあって、そのことを非常に誇りに感じていたので、日本人が嫁いで来たことを大層喜んでくれた。今でも舅は、私を他の人に紹介する時に「花嫁と呼んでくれている。台湾に来てそんな生活が始まる

と、日本人としての自分を強く意識せざるをえなくなった。今まで損失だと感じていた日本人というバックグラウンドが突然、尊敬される材料となった。それは私にとって大きな驚きであった。そして私が嫁いで来た原住民の夫や家族、教会の方々は、私とは全く逆で、単に人種的理由から、個人の資質とは関係なく蔑視されていた。

その現状を自分自身で体験し、人が人を評価する基準は全く当てにならないものであることを発見した。それでも、自分の愛する家族や教会の人々が差別される状況を見て、台湾で日本人であることの利点を大いに活用するようになった。教会で場

所を借りたり、政府や近所の人に何かお願いをする時には、日本人である私が交渉するとはほとんどがうまくいった。特にNPOを開設してからは、原住民に対するあからさまな人種差別が起きると、私が代表して抗議をし、相手が認めなかったり謝罪しない場合、「日本人として正式に抗議する」と言うと、ほとんどの問題が解決された。

私は台湾に来て、生まれて初めて日本人として生まれてきたことを心から感謝することができた。そして、台湾で長く生活すればするほど、あれほど日本人であることを嫌がっていた私が、実は極めて典型的な日本人であったことも発見した。実はこのことが私には最も意外なことだった。

私は決して几帳面な性格ではない。日本では埃も手垢もそんなに気にしない。それでも原住民の教会にいると、私は「病的なほど几帳面な人」となってしまう。おかげで子どもたちの衛生面の指導、トイレやキッチン環境は改善された。また日本人は、台湾統治時代の政策のように「教育

すること」に長けている。そして耕作の文化で培った粘り強さと、コツコツ積み上げる勤勉さも持ち合わせている。それは、寝ていても道端のバナナで生きることの出来る南国の人々からは生まれにくい気質でもある。私のこのような気質は、原住民の伝道や教育福祉に大いに貢献することとなった。

東日本大震災で台湾は、震災の発生から最も早く、しかも最終的には200億円以上という驚くべき義捐金を日本に提供した。どれだけ日本に愛情を寄せているか、この金額だけ見てもよくわかる。台湾は、日本の九州よりも少し小さいぐらいの国土に2400万人ほどの人口が暮らしている。民主共和制が敷かれ、4年に一度の選挙によって総統が選ばれる。経済の発展も著しい。けれども、中国による「台湾は中国の一部である」という主張から、国際的に「国家」として認められず、国際連合にも加盟できない状況が続いている。よって、国内で人種差別などがあったとしても訴える場所がなく、原住民は今もなお法的に差別されたままである。



原住民の子どもたちに勉強を教える働き

現在、このような台湾に来て日本人宣教師は多くはない。この台湾には日本人の良さが生かされる場所がたくさんある。なんとと言っても80歳前後の人とは直接日本語で話すことができる。

「神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。これは、神を求めさせるためであって、もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。」

（使徒17:26-27）

私は台湾において、神が私を日本人として創造し、日本人として神に用いられていることを深く知ることになった。

東日本大震災で台湾は、震災の発生から最も早く、しかも最終的には200億円以上という驚くべき義捐金を日本に提供した。

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

第15回

先駆者の足跡を辿る

台湾宣教師 **丸山 陽子**



神学校を卒業する間際に、ある恩師から一冊の本を頂いた。井上伊之助の『台湾山地伝道記』という本だった。もうじき台湾に嫁いで行くことが決まっていた私には、数少ない参考書の一つだったのですぐに読んだが、当時はあまり実感がなく、昔のこととしか捉えられなかった。やが

て著者の人生が私の宣教の模範になるのは、その時点では全く考えていなかった。
井上伊之助は1882年(明治15)、高知県幡多郡西土佐村(現・四万十市西土佐地区)に生まれた。その後彼は上京して内村鑑三の著作を読み、メソジストの中央会堂で救われ、神

の召命を受けて献身した。聖書学院(東洋宣教会)の2年生の時に、父親が台湾で樟脳を作る会社で作業中、山地族のタロコ族(タイヤル族と同じ血統)に首を狩られて殺された。しかし井上は、徹夜祈禱の中で台湾山地伝道への召命を受け、開業医のもとで医学を学び宣教師の備えをした。1911年から1947年まで、台湾山地(原住民)宣教に赴き、タイヤル族やブヌン族への医療伝道活動を行った。なぜこの宣教師が医療活動をしたかというと、当時の台湾は日本の植民地であり、日本政府がキリスト教の布教を禁じていたからである。彼は医療活動を通して無言の宣教をしたと伝記には書かれていた。

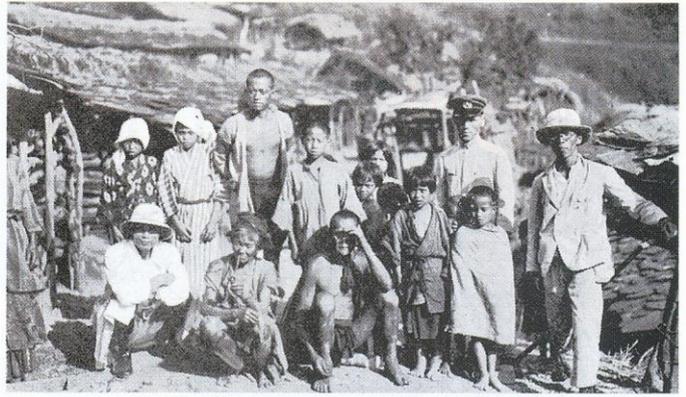
私が宣教師として働き始めてから、何かと高知県幡多郡の方々にお世話になることが多い。幡多郡といえば日本の果てで、東京から台湾に行く方がより、東京から幡多地方に行く方がはるかに時間がかかる。この幡多地方から私と同じ働きをする原住民宣教師が出ていたことを後で知り、この地方の方が山地宣教と関係が深い理由を納得した。ある日、その幡多地方の教会の牧師から、井上伊之助が伝道した地域を訪ねたいので案内してくれないかとお願ひされた。



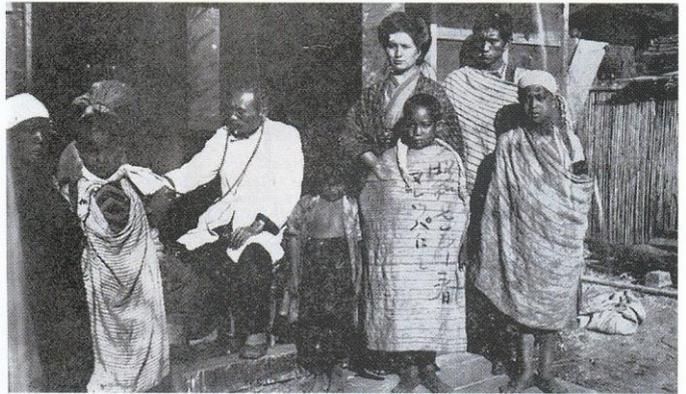
晩年の井上伊之助
〔台湾山地伝道記〕より引用、以下の写真も同

マレットパに着いてみると、驚いたことに結構多くの老人が住んでいて、そのほとんどが流暢な日本語を話していた。彼らは教会堂で美味しい料理を作ってくれた。食後の交わりでは、その場にいた老人全員が「井上伊之助」を

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団（日本AG）の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。



昭和8年、台湾のマレバにて。前列左端が井上伊之助



昭和7年3月マレバに着いて1週間目、工事中の診察室にて

知っていた。彼らの話では、井上は実際は無言の医療伝道をしていたのではなく、毎日普通にこの地方の牧師として説教し、伝道していたそうだ。そして、無償の医療もしていたので、その愛に触れて多くの人が救われて教会が生まれ、今に至っているとのことだった。当時の伝記に書

けなかった事実を実際に伝道された人たちから直に聞くことができて、私は非常に感動した。井上の父親は、タイヤル族の「首狩り」という悪い習慣の犠牲になった。彼の偉大なところは、その悲劇が起った場所にあえて宣教に出かけて行ったことである。彼はこの行

彼は、父親を奪った原住民を憎んで復讐するのではなく、かつての敵のために祈り、彼らために全生涯を捧げて伝道し、愛することこそ神のみ旨と知り、それを実行したのである。

動を「愛による仇討ち」と言った。彼は宣教中に日本人の妻との間に5人の子供を授かったが、上の3人は現地で風土病に罹り亡くなっている。自身もマラリヤに罹ったが、それでも台湾宣教を辞めることはなく、台湾の日本統治が終わって強制送還されるまで長く原住民伝道に勤しんだ。

私は、この小旅行の前に多少スランプの中にあつた。私は原住民宣教

の中で若者を教育する立場の中にある。原住民には「首狩り」と同様、修正すべき習慣もいくつかある。良い習慣というものは、教育と訓練をしなければ身につかない。けれども、原住民の若者の多くが教育に対して反抗した。そのため私は、彼らの非難的になることが多かった。教育を通しての宣教は、労してもその実をすぐに見ることができず、日々の非難にも一人で耐えなければならぬ。このような霊的な孤独と疲労が実は一番こたえるし、そんな状況がずっと続くのが海外宣教でもある。そんな中で知った井上伊之助の原

住民宣教の「愛による仇討ち」の姿勢

は、私の心を深くとらえた。彼は、父親を奪った原住民を憎んで復讐するのではなく、かつての敵のために祈り、彼らために全生涯を捧げて伝道し、愛することこそ神のみ旨と知り、それを実行したのである。それに比べれば、私が原住民のために

払った犠牲など全く取るに足らず、むしろ私は、私を非難し恩を忘れた原住民の若者をなかなか赦すことができなかった。そんなちっぽけな私と井上伊之助では、同じ原住民宣教師ではあっても大きな隔たりがあると感じた。そんな偉大な先駆者を目指して、これからは励むことができると、この旅に誘って下さった幡多の牧師に心から感謝した。

井上伊之助の宣教は、当時は結果の出ない宣教だと評価されたようである。その井上が日本に帰国した後、寝たきりになった時に、台湾の玉山神学院の院長がタイヤル族初の伝道師ウイランタツコを連れて井上を訪れた。そして、原住民の村にリバイバルが起きたことを報告した。その時彼は、「神様は私を肥やしとして、福音の種を芽生えさせました。私はもう玄界灘の藻屑になってもいい」と語った。井上は1966年、84歳でこの世を去った。私が生まれたのも1966年である。偶然とは思えない。私は彼の原住民宣教のバトンを受け継いだと思っている。

井上の墓石には「愛」の文字と「トミーン・ウットフ」というタイヤル族の言葉が刻まれている。「神は織り給う」という意味だ。井上の犠牲の人生が神に織られて美しい布になったように、私の人生も一つの糸としてその模様の一部に加わりたいと心から願っている。

日本から台湾へ、 台湾から日本へ

最終回

涙で蒔いた種

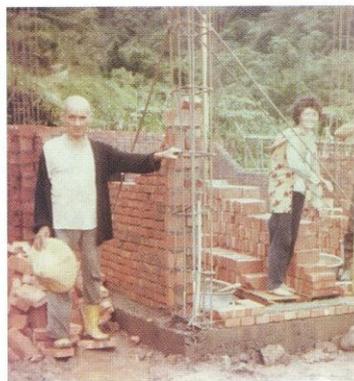
台湾宣教師 丸山 陽子



最終回になったので、私が尊敬するC宣教師を紹介したい。
ある日、私たち夫婦のところにとりのアメリカ人宣教師から電話が掛かってきた。私たち夫婦と舅夫の父へに会って食事をしたいとのことだった。私は初対面でもあるし、ただ食事をしただけだったが、あと

から舅がこの宣教師についていろいろと話してくれた。それによると、この宣教師は、夫の高校から大学までの学費、また当時の夫の家族のほとんどの生活費を出してくれていたという。その後、3年ほどしてアメリカに行く機会があったので、夫婦でこの宣教師の家を訪ねた。素敵な

平屋の小さな家で彼の再婚相手が準備してくれた夕食を食べながら驚くべきことを聞くこととなった。



会堂をレンガで作るタイヤル族の信徒

彼の名前はC宣教師としておくが、かつて8年ものあいだ原住民伝道に携わり、特に台湾北部と中部のタイヤル族の地域で宣教をしたという。その間、ずっと舅の顔牧師と一緒に多くの村で開拓伝道を行い、なんと三十以上の教会を建て上げた。それだけでなく、これらの開拓教会に伝道師を送るため、原住民専門の神学校を建て、短期神学コースまで作った。ともに宣教を行った舅とその家族は、この宣教師からの支援を受けることになり、C宣教師の勧めで、夫の家族は子供たちの教育のために山から台北に降りてきた。
その頃は台北にはほとんど原住民は移住していない時代だった。C宣教師は舅の下の三人の子供たちの教育費の支援してくれた。特に夫は、彼の支援のおかげで原住民でありな



原住民専門の神学校

がら大学を卒業できた。当時、大学はおろか高校を卒業できる原住民も極めて少ない時代だった。C宣教師が働いたその8年間に、タイヤル族の多くの村に教会が建てられ、神学校もでき、現地のリーダー候補の教育支援もし、その働きはとも順調で成功を収めているように見えた。

そんな矢先、C宣教師は突然アメリカに帰国してしまった。私が嫁いで来た後、舅は宣教師が引き上げてしまった後の残された教会の苦勞や、家族の収入がなくなつて困窮を極めたことなどを、たびたび私に話した。そのため、その頃の私の中にはアメリカ人宣教師に対してあまり良くない印象があった。

しかしその時、私は、その後の結果がどうであろうと、C宣教師が夫

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団（日本AG）の中央聖書学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。

の家族の生活を長年支え、夫を大学にまで行かせてくれたことに感謝の思いを伝えた。しかし、途中で教会を放り投げられた舅の無念も、どうしても伝えたいと思った。そして、なぜそんな順調な宣教のさなか突然帰国したのかを尋ねた。

C宣教師は食事中にもかかわらず、突然ナイフとフォークを置いた。私は彼が気分を害してしまったと思い、その質問をしたのを後悔した。しかし彼は、一呼吸おいて、その理由をゆっくりと話し始めた。

彼が台湾で宣教していた頃、娘が高校生になり、台湾にふさわしい学校がないため、夫人と共にアメリカに帰国させ、しばらく単身で台湾宣教をすることになった。そんな折、娘がアメリカで性的な暴行を受けるという事件が起きた。娘の心身の回復のためにC宣教師は急遽、帰国せざるを得なかったという。その後しばらく経ってから、心労が重なったのか、今度は夫人が病気になる、亡くなってしまう。

C宣教師は、自分の単身赴任中に娘がレイプされ、それがもとで夫人

も病気になるようになったことで、自分を責め、宣教師も辞めることになった。残してきた台湾の教会も心配でならなかったが、他の宣教師たちもいたのので、彼らに委ねる決心をした。ところが結局、他の宣教師たちは山の宣教を支援せず、山の神学校も閉鎖し、教会も後継者不足で立ち行かなくなったことを随分あつて知ったそうだ。彼は申し訳ないという表情で、これらのことを私たち夫婦に話してくれた。

私は彼の話を半分まで聞いて、もう涙で聞いていられない状態になった。C宣教師がそんな大きな苦しみに残されたタイヤル族の教会にも知らされていなかった。彼が愛している娘が深く傷つき、妻は天に召されて行き、彼はどんなに宣教師になった自分を責めたことだろう。私たちの想像を超える痛みをC宣教師が長年抱えてきたことを初めて知った。

その衝撃的な告白を聞いたあと、私たちも台湾の山地伝道の経過を、同じくできるだけ淡々と、ゆっくりりと語った。C宣教師が引き上げて宣

教が立ち行かず、牧師であった舅は日本に行つて山地伝道の応援のお願いをしたこと、夫が招待留学生として日本の神学校で学ぶことができたこと、私たちが開拓した台北の原住民教会に次々と奇跡が起きたこと、夫が原住民であるにもかかわらず教団のリーダーになったことなどを話した。

最後の方では、私は感情を抑えることができなくなり、涙で主とC宣教師に感謝する言葉しか出てこなかった。私たちは食事の途中であつたにもかかわらず、その場に四人で立つて泣きながら主を讃美した。私たちが台湾で見させて頂いている実りは、確かにこのC宣教師が涙で種を蒔いた結果であつた。ただ、長年お互いにそのことを知らなかっただけなのだ。



村の教会の献堂式

宣教とは、自分の安全な領域を出て、大きなストレスと危険を覚悟で現地の人々の救いと霊的建て上げに貢献する働きである。そこで費やされた犠牲は、現地で認められ覚えられないとは限らない。自分の功績よりも現地の人々の建て上げを重視してこそ宣教と言える。

最後に私の宣教に大きな影響を与えた「地域開発に奉仕する者にとつての黄金律」を示してこの連載を閉じたい。

住民の所に行つて、
住民の中に住んで、

その土地の気候、風土、習慣から、
生活の知恵を学ぼう。

しかし、危険な迷信は止めるように
勧め、

住民の身になって考え、

住民のニードに応じて自らを用意し、

住民と共に生きよう。

彼等が知っていることから始め、
彼等が持っている物の上に築こう。

最後に、君が最上の指導者であるならば

その事業が完成した時に、

住民がこう言うように、

「此の事業を完成させたのは、
我々自身だ」と。

宣教とは、自分の安全な領域を出て、大きなストレスと危険を覚悟で現地の人々の救いと霊的建て上げに貢献する働きである。

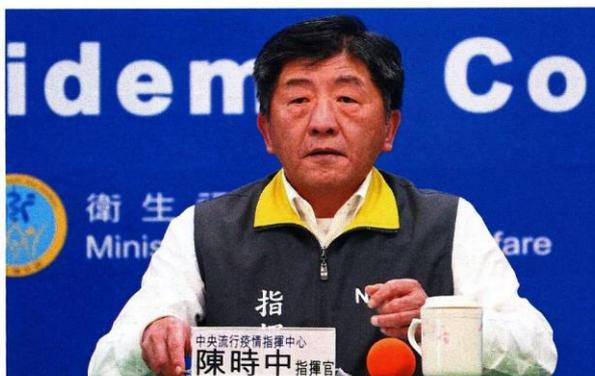
台湾 コロナ禍の中 過去の経験が生きる

台湾宣教師 丸山 陽子

structuresxx/PIXTA

1月中旬から新型コロナウイルスによる肺炎のニュースが台湾で報道されるやいなや、台湾政府はすぐに対策本部を設け、毎日休みなく午後2時に記者会見が始まった。この記者会見は衛生福利部の部長である陳時中氏が、100日経った今も1日も欠かさず取り仕切り、ほとんど同じ姿勢を崩さずに行っている。彼の毅然とした態度と温厚な話しぶりが、この台湾を100日間支えたと言っても過言ではない。

中国・武漢から最初の台湾人帰還チャーター便が桃園空港に到着した時、1人の感染者が紛れ込んでいた。中国側から感染者がいるとの報告はなかった。それを知った陳部長は、記者会見の席上で涙を流した。この



会見を行う台湾衛生福利部部長の陳時中氏 写真: AFP/アフロ

姿は人情深い台湾人の心を掴み、それ以後、陳部長の指導に皆が喜んで従うようになっていった。

2003年、台湾ではSARS（重症急性呼吸器症候群）の感染が広がり、346名が感染し、37名が死亡した。そこには多くの医療従事者も含まれていた。その頃、私たちの教会は公民館を使って礼拝していたのだが、政府は全ての公的施設の貸し出しを禁止した。そのため、まったく予定には無かった会堂建築に慌てて着せざるを得なくなり、現在使用している台北神愛教会が建てられた。当時、台北市ではマスクも体温計も店頭から一気になくなったが、私たちは日本からこれらの物資を送っていただけ、大いに助けられた。しかし、街は一種のパニック状態となり、人々は恐れから殺気立ち、苛立ったタクシードライバーに追突されて私とスタッフが大怪我をするという事故も起きた。

台湾政府は18年前にそうした辛い経験があったので、今回のコロナ危機に際しては、すべてのマスクの買い上げと、官民を挙げた自国内でのマスクの生産を急ピッチで進めた。ほどなくして全国の薬局でのマスクの配給が始まり、健康保険カードを通してすべての人が平等にマスクを購入できるようになった。その後、コンビニでもマスクが買えるようになり、パニックが起きることは全く

伝道においても、道端での路傍伝道をインターネットによる伝道に切り替え、Facebook、Instagram、YouTube、TikTokと、あらゆる手段を駆使して伝道を継続している。

こうした事態が進む中、私たちが家族は日本に一時帰国した。元々は教団の教職研修会が2月の終わりに横浜で予定され、それに参加するため、また長い間会っていなかった実家の父に伝道するためでもあった。結局、研修会は中止となったが、チケットはキャンセルできず、家族全員で日本に帰国し、父に伝道する機会も与えられた。人出の少ない日本で家族旅行も満喫した。しかし、私たちが日本を発つた日はなんと、自由に台湾に戻る最後の日だった。その後、

なかった。また、海外からの帰国者は強制的に14日間の外出禁止となり、クレジットカードやスマートフォンによって管理され、それを破ると日本円で30万円ほどの罰金が科せられることにもなった。



全ての人が平等にマスクを購入できた

現在、台北のほとんどの教会が集会を自粛している中で、私たちはセル集会を続けることができて、それは本当に辛いことだと思う。また、過去10年間に経験した公

あらゆる航空会社が飛行を停止した。無事に台湾に戻った私たち夫婦は、3月初旬からの集会規制に対応すべく、忙しい日々を送ることになった。台湾は、感染者数そのものは増えていなかったが、念のために100人以上の集会禁止通告を出した。私たちは、集会を6箇所に分散して、各人が1.5メートルの距離を保って集会を続けた。幸い、私たちの教会のメンバーはほとんどが一緒に生活をしており、集会禁止通告が出されても孤独になるということはなかった。また、日頃からセルの学びと実践をしていたため、6つの場所に分散しても、牧会上ほとんど打撃を受けずに済んだ。また5年ほど前から、山岳地帯に住む原住民のためにインターネットを使った情報発信も盛んに行っていて、その技術を用いて、6つの集会に高画質のワークショップとメッセージをすぐ



現在、6つの場所に分かれて礼拝を捧げる

民館を転々とする少々つらい集会形式は、教会は必ずしも一つの礼拝堂に集まることに限らない、という教観を私たちにしっかり植えつけていた。伝道においても、道端での路傍伝道をインターネットによる伝道に切り替え、Facebook、Instagram、YouTube、TikTokと、あらゆる手段を駆使して伝道を継続している。以前よりも、むしろ忙しくなっているくらいだ。

WHO（世界保健機関）にも加入を認められない台湾だが、主はこの国を守り、私たちの教会と家族をも守ってくださっている。それは、私たちが守られていることを喜ぶだけでなく、他の人々を祝福する使命を与えられており、それを発揮するためにこの地に派遣されているのだと感じている昨今である。

二度の燃え尽きを通して学んだこと

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団派遣 台湾宣教師 丸山陽子



家族と共に

突然の体の不調

その日の朝は、特別に忙しかったわけでも、何か悩んでいたわけでもなく、いつものように教会付属の喫茶店でミーティングをしていた。スタッフの話聞いてみると、2秒くらい急に後ろに吸い込まれるように気が遠くなった。会議を進めながら、今のは何だろう……と考えた。昨夜の睡眠時間が足りなかったかな、ぐらいに思った。ミーティングが終わって、事務所に戻ってパソコンの前に座っても、なぜかその日はやる気が出なかった。前に座っているスタッフと会話を交わすと、顔色が悪いと言われ、その日は早めに帰宅して寝ることにした。

翌朝、布団の中で目が覚めると、よく眠れた感覚があった。早く寝たからか良い気分だった。期待をもって目を開けると、見えるものすべてが左から右に回転していた。しばらく頭が混乱して、何が起きている

のか全く理解できなかった。もう一度布団をかぶり、目をつぶってじっとしていた。数分で治まると思ったからだ。ところが、しばらくして目を開けると、同じくすべてのものが大きく回転していた。

その後はベッドを降りて立つこともできず、寝たまま家族を呼ぶと、夫も娘も私より動揺してしまい、救急車を呼んでくれた。サイレンをけたたましく鳴らしながら救急車は5分以内に家に着き、私を病院まで運んでくれた。その途中で何度も吐いてしまい、最悪の気分が病院に着いた。ちょうどその頃、台湾の病院はコロナの検査が始まったばかりで混乱の中にあり、診てもらえる医者がおらず、様子見のために入院させられた。しかし、治療はされなかった。天井がぐるぐる回るひどいめまいは、入院している3日間ずっと続き、3日目の午後にはやっと少し治まり、コロナの渦中という理由で帰宅するし

かなかつた。帰宅して、やっとトイレまで歩けたが、それ以外の動作は一人では全くできなくなった。見えるものが回転する感じは治まったものの、平衡感覚は失ったままで、その日からトイレ以外はベッドの上を離れられなくなった。

その頃、世界中の主要都市がコロナで次々とロックダウンされる中、官民を挙げて抑え込みに成功していた台湾も遂に抑え切れなくなり、全土で実質的なロックダウン状態となった。そのため、私たちの教会も、日曜礼拝を初めとするすべての集会をオンラインに切り替えた。しかしそのことで、私はベッドの上でも宣教に関わるすべての奉仕ができる機会が与えられた。教会自作の賛美を三曲リリースし、そのうちの一曲は台湾で大ヒットした。音楽制作は病んだ私の心を癒やしてくれた。好きなことだけは止めずにいたので、病気で役に立てないという劣等感から

も守られた。しかし、このような体の状態が、その後8か月以上も続くとはいっていいなかった。

共有文化のストレス

台湾人の夫と私は日本の神学校で出会い、結婚の約束をした。夢を通してそのことを示してくださった神の約束と守りを信じて、行き先も知らずに、台湾に着いて国際結婚をした。結婚式当日、実は夫が台湾の少数民族であり、しかも被差別民族の出身であることを初めて知り、私は結婚式中なのに、これから起こり得る戦いを想像して、正直とても落ち込んだ。しかし、その日から台湾原住民宣教において毎日のように起こるカルチャーショックと(原住民への)差別との闘いは、想像を遙かに超えるものだった。そして今年、その後の26年間の闘いに全力で応じた私は、遂に燃え尽きてしまったのである。

まるやま・ようこ 1966年、山梨県甲府市生まれ。山梨大学教育学部卒業。甲府養護学校小学部勤務。その後、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団（日本AG）の中央聖書神学校に入学し、卒業と同時に顔金龍氏と結婚、台湾の台北市で開拓伝道を始める。1999年、日本AGより正式な宣教師として認められ、現在に至る。



結婚当初の私(右上)と夫。左端は舅

結婚と同時に、その週から開拓伝道が始まった。台湾の家にはどこも大きな客間があつて、そこを開放して礼拝場所とした。最初の日曜日からは夫の両親が出席してくれて出席者ゼロは免れたが、毎週夫の家族だけの礼拝が続き、礼拝後の愛餐と交わりの時間の方が礼拝より長く、時には夜遅くまで続くこともあつた。現地の言葉も原住民の文化も、全く理解してなかった当時の私は、礼拝も交わりも言葉を聞き取れず、とても

孤独だった。

舅は日本が台湾を統治していた時代に国民学校を卒業していたため、会うたびに日本語で話しかけてくれた。そのうち親戚も礼拝に来るようになり、毎週10人ぐらいの出席になった。そしてその頃から、私の私物がよく無くなるようになった。これは本当に辛かった。冷蔵庫から私の部屋の引き出しまで、誰かが断りなしに開け、断りなしに持って帰るのだ。それを親戚たちにやめてもらえするように夫に何度も頼んだが、なぜそんなに私が怒るのか全く理解できない様子だった。礼拝が終わる度に夫と喧嘩になることがしょっちゅうだった。その後、一切の持ち物（下着や歯ブラシまで）を共有するのが原住民の文化だと知るまでに2、3年、この文化に私自身が慣れるまでに10年以上を費やした。また原住民には、この共有文化以外に狩猟民族独特の文化があつて、私をたびたび驚かせた。

開拓から5年ほどで、客間の礼拝

は人で一杯になり、公民館を借りて礼拝をするようになった。しかしその経費で家計は苦しくなり、幼い子ども二人を抱えた私たち夫婦は、8畳一間で台所も無いアパートに引越した。夫はあまりの狭さに引越しに抵抗したが、私はやっと家族だけのスペースが確保できるのでホッとした。プライバシーが守れることで夫との喧嘩の回数も減ったが、今度は私の心理状態に異変が現れた。引越してすぐの頃から急にやる気がなくなり、感情が出なくなつた。ある日、線のある所（部屋の床の模様など）を跨いで越えられなくなつた。

その様子を見ていた夫は、私がちよどピザを切り替える時期でもあり、一人で日本に帰って気晴らしができるようにと、すぐに準備をしてくれた。今思えば、結婚してすぐに始まった文化的なストレスと開拓伝道期の緊張で、私の心はすでに限界を超えていて、引越しを機にその症状が出たのだと思う。

初めて精神科を受診

日本に帰って、すぐに横浜にいる弟を訪ねた。彼は心理療法士でクリニクを開業していて、私の状態を聞くとすぐにもカウンセリングが精神科にかかることを強く勧めてくれた。背中を押されて初めて精神科の病院に行ってみた。個人の開業医で、心理療法士の資格も持つ方だった。話し方がとても柔らかく、私のこれまでの経緯を聞くと、「海外で大変だったんですね」と声をかけてくれた。私は不覚にも涙が止まらなくなつてしまった。軽い抗うつ剤を出されただけだったが、それを服用した私は、弟の家で3日間ほどただひたすら眠り続けた。

二人の子どもを残して日本に帰ったので、結局2週間ほど再び台湾に戻った。しかし、文化の違いと開拓伝道の重荷から来るストレスはたまる一方だった。それに加えて、差別されている原住民の信徒たちのケア、DVを受けたり遺棄されたりする原住民児童の保護、おまけに会堂建築まで始まって、またもや私の限界を超えようとしていたところの一つの事件が起こった。小学1年生になる長女がコンビニでお菓子を盗み、店長から電話が入った。その頃、私は長女の教育のことで、とても悩んでいた。親の言うことを聞かない娘

しかし、その日から台湾原住民宣教において毎日のように起こるカルチャーショックと（原住民への）差別との闘いは、想像を遥かに超えるものだった。



夜の街で働く原住民に福音を伝える

に対してイライラが募っていた。そんな中で起こった事件だった。夫がキリスト教雑誌で牧師専用カウンセラーの広告を探してくれて、娘を診てもらうことにした。カウンセラーは娘の状態を聞くと、まずは心理テストを受けさせた。その時、ついでお母さんもどうですかと、一緒に受けるように誘われた。問題行動があるのは娘であって私ではないのに、なぜだろうと訝しく思ったが、二人一緒だと値段も安

くなるというところで、しぶしぶ受けることにした。それがカウンセラーの作戦だったとは知る由もなかった。テストの結果、娘は多少おらか過ぎるところがあるけれど、ほぼ正常だった。そして私の結果は、極端な性格で異常、というものだった。私はその結果に本当に驚いた。カウンセラーからは、「治療が必要なのは娘さんではなく、あなたです。」とはっきり強く言われた。人を導く宣教師でありながら、自分が異常な性格とは認め難く、恥ずかしくもあったが、娘たちの将来のためにと自分に言い聞かせ、それからカウンセリングを受けることにした。

それから私は、なんと6年以上もカウンセリングを受け続けることになる。振り返ってみると、私の母は若い頃から重いつ病で苦しみ、入院を繰り返した末に48歳で自死した。母の家族のほとんども、過労や心臓病など、ストレスが大きな原因となつて亡くなっている。父の家族は母とは逆で、非常に気性が激しく、攻撃性が外に向かっている。私はその両方の傾向と、しかも偏った考え方を受け継いでいる。カウンセリングによって、自分自身のゆがみをまらで玉ねぎの皮を一枚一枚剥ぐように気づかせてもらった。召命感だけで台湾に来たが、異文化の中で生活することも、たましいを牧会するこ

とも、そして人の親になることも、実際には全く準備ができていなかったのだ。

夫婦間でも度々トラブルがあることを聞いたカウンセラーは、夫も連れて来るようにと言った。夫は思いのほか強い抵抗を見せた。彼曰く、自分は神に頼っているのでカウンセリングなど必要ない、ということだった。しかし、カウンセラーと私の説得に根負けし、私と一緒にカウンセリングを受けた。カウンセリング中、私は夫の驚くべき幼少時代の出来事を聞くことになった。それは彼が小さい頃、男性から性的ハラスメントを受けていて、非常に傷つけられたという話だった。それに加えて、牧師である父親からの家庭内暴力、原住民ということで小学生の頃に受けた教師の暴力や同級生のいじめなど、想像を絶する幼少期を送ってきた。その告白を通して、夫はそれまで自分は汚れていて価値がないと信じ込んでいたが、誰から受け入れられたという経験を、初めてしようだった。

これを機に、夫も変わっていった。説教でも幼少期の傷について触れるようになった。すると、教会のメンバーのほとんど全員が、夫と同じように幼少期に性的な暴力を受けていたと告白してきたのだ。教会全体の癒やしが、この時に始まった。この

ような幼少期の傷が原住民にとって共通のものであることを、私はその時初めて知った。宣教師として遣わされて10年以上も経っていた。

私自身は、父から愛されなかった、愛を受けられなかったという怒りと、母を自死から守れなかったという悔しさを、ずっと心にしまつて生きてきた。カウンセリングを通して、そんな心の葛藤を処理することができ、最後にカウンセラーを母に見立てて最期のお別れをすることができた。実は私は、母が死んだことを20年も受け入れていなかったのだ。その日のことは、今でもはっきりと覚えている。外に出ると空の色が全く違って見えた。初めて空の青さを知った。

「生かされている」実感

宣教師になって20年以上が経つ。この二回の行き詰まりを通して、私は自分の心が人よりも少し繊細で、周囲の助けを必要とすることを認めることができた。そして昨年5月、二回目の会堂建築が一段落してしばらくたった後、ひどいめまいという形で、私は再び燃え尽きを経験した。これまでの経験をを通して、心と体の専門家に頼ることにためらいはなかった。多くの病院に行き、様々な治療をしてもらった。しかし結局、そうした検査では確かな原因がわからなかった。ゆえに、すぐに効く治

療法も見つからない。動悸や息切れで呼吸困難になることもあり、一人で歩くことが困難なため、教会での第一線の奉仕を退かざるを得なくなった。

激しいめまいに襲われたあの日からおよそ8か月が経つ。平衡感覚は完全には元に戻らず、心理的にも時々落ち込んだり、諦めたい気持ちにもなる。けれども今回、ベッドから降りて動く自由が奪われたことで、発見できたことがある。私は、生きているのではなく、生かされているということだ。ベッドの上で寝ている、自分の意思とは関係なく私は呼吸し、脈も打っている。そんな当たり前のことに、ずっと気づかずにいた。幼少期から何でもかんでも一人で頑張ってきたつもりで自分にとって、「生かされている」という実感は、とても大切なことだと思う。

私の使命は、この地で台湾原住民にイエス・キリストの十字架と復活を語り、その福音の実践として彼ら

を愛し、その人生をサポートしていくことである。それがどれだけ大変なことであるかは身をもって体験している。そんな厳しい宣教の現場に神は、人格的には全く欠けだらけの私と夫を遣わされた。それは、なぜだろう。私は、究極の孤独の中で、夫に相談することもできず、ただ神にのみ頼るということを得た。そして三度の燃え尽きを通して、他



礼拝を導く

者に頼ることを学んだ。またカウンセリングを通して、自分の生い立ちや育った家庭が、どれだけその後の人生に影響を与えるものかも知った。夫の心の傷を通して、台湾原住民のほとんどが幼少期から深い傷を受けていたことを知った。夫自身を、より理解するようになった。

今回、私は自分の病気や不調について、初めて文章にしてみた。その理由は、牧師、伝道者、宣教師などは、それぞれ自分の弱さを抱えながら人の心やたましいを扱うことを仕事にしており、他の人以上にケアを必要としていることを多くの方に理解していただきたいからである。また、信仰があるために心理的・医療的専門家に頼ることにためらいを感じている同労者の背中を押ししたい思いもある。今年、下の娘がやっと成人した。いつか娘たちが私たち夫婦の元で生まれ育って良かったと言ってもらえるような人生を、私は歩みたいと願っている。

舟

私は、生きているのではなく、生かされているということだ。ベッドの上で寝ていても、自分の意思とは関係なく私は呼吸し、脈も打っている。